

殷墟遺跡の範囲全体に分散分布していることが見て取れる [岳洪彬ほか 2011: 269]。つまり殷墟の王都は、中央から周囲にじだいに膨張発展したのではなく、開始期から王都の全範囲に族邑が分散分布していたことになる。

岳洪彬らはこうした状況から、殷墟の王都は、最初に宮殿・宗廟区を中心として、周囲の広範囲に族邑を分散的 (点的) に配置してはじまり、やがて各族邑の人口が増大することで各族邑自体が膨張し、結果として族邑間が接近して空白地が減少し、全体に稠密な (面的な) 都市空間を形成するようになったと述べて、これを「族邑モデル」と呼んでいる (図20)。筆者は各族邑が膨張すると同時に、殷墟では都市内の族邑の数も増加したと考えている。

族邑に結びついた殷墟遺跡各所の族墓地からは、しばしば族記号を付した青銅器が出土する。一般的には、族邑に関係する族墓地では、主要な族記号が単一であることが指摘され、別の墓区には別の族記号が対応していると説明されてきた。しかし、嚴志斌が述べるように、例えば先述した殷墟西区では青銅器の族記号が25種も出土している。広大な殷墟西区の墓地とはいえ、その墓地を使用した20以上もの族邑が並び立つ状況は考えにくく、実際には異なる氏族の族的集団が王都内のある地点で雑居し、生活の場を共有するという形態も考慮すべきとする [嚴志斌 2022: 59-60]³⁷。

このような説明は殷墟内の複雑な居住の実態に見合ったものと考えられ首肯されるであろう。しかし、大小の墓地と大小の居住地が相関している現象は明らかに認められ、同族による居住地と墓地からなる族邑の単位が、殷墟の都市空間の基本にあったことは確かであろう。族邑モデルが示すように、都市創建時においては族邑の相互が交わることも少なく、比較的単純な族的集団による大小の族邑が基本となっていたが、やがて族邑の膨張と族邑の増加とともに族邑間の交雑状況も増えて、ある意味では一段階公共性を高めた雑居の形態が生まれていたのではないだろうか。公共性の高まりは、地縁的社会的広がりという、伝統的に言われてきたこの時代に進行する社会変化を反映しているものとも考えられる。

岳洪彬らの族邑モデルでは、居住地と墓地が同地点あるいは近隣に営まれ、また数多くの族邑では手工業工房を族邑内あるいは近傍に配置していた [何毓靈 2019] [嚴志斌 2022]³⁸。各族邑は、小規模であっても独自の環濠や壕、水路、貯水池、道路などをつくる事例も指摘されている。一方で、族邑間を結ぶ道路網や水系システムなど、王都全体のインフラがどのように整備されていたのかについては、なお不明なことが多い [岳洪彬ほか 2011: 271]。

族邑に関して注目したいのは、各族邑には一族の宗廟が付属した場合が指摘できることである。すくなく

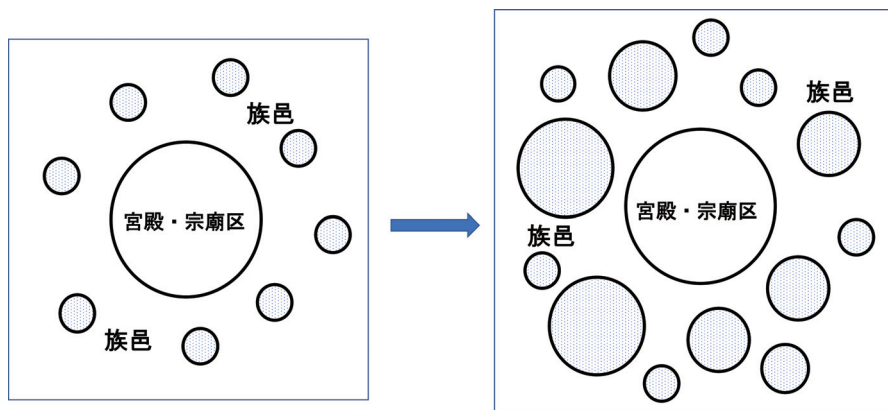


図20 「族邑モデル」の概念図 (左: 殷墟早期 右: 殷墟晩期)

王都の中央に宮殿・宗廟区、その周囲に大小の族邑群。族邑は数を増し、族邑自体も成長するが、王都全体の範囲は早期からあまり変化しない。[岳洪彬ほか 2011: 270] にもとづいて作図

³⁷ 族記号は殷墟西区以外にも、郭家莊周辺墓地で7種、大司空村周辺墓地で10種、劉家莊周辺墓地で18種、徐家橋村周辺墓地で4種などが出土している。族記号と族邑の単位は、単純に一対一に対応するということではない。

³⁸ 殷墟の王都における手工業のなかには、各族邑の自給的な小規模生産もあったが、王都全体の需要にこたえる生産活動、あるいは遠隔地からの貢納品や交易品を原材料として高級品を生産するという王朝の再分配システムに関係した官営の工房群 (工業区) が存在したと考えられる。官営の工房での生産にもまた特定の族邑が参与して、それぞれの族邑が技術者や工人を提供していたと想定される。

とも一部の族邑に所属する族墓地では、墓前において被葬者たる父祖を祀ったと思われる祭祀遺構が見られることがある。殷墟遺跡東南部で1931年に発見された後岡遺跡では、その後の数次の発掘調査を経て、複数の大型墓をふくむ族墓地が確認されている（図21）。族墓地全体はいくつかの小墓群に区画されるが、族墓地のすべての墓が北向きの方位で一致し、副葬土器の組成もよく統一されており、族的集団のまとまりを反映したものと考えられている〔郜向平 2018: 126〕。この後岡の族墓地の近くでは、被葬者を対象としたと思われる円形の祭祀坑が発見されている。遺構の性格についてさまざまな意見はあるが〔杜金鵬 2007〕、族邑の構成員が一族の墓地において、父祖の祭祀をおこなったことに関係する祭祀遺構と考えておきたい〔中国社会科学院考古研究所編著 2003: 358〕³⁹。族邑に付属する祭祀関係の遺構としては、墓地の祭祀遺構のほかに、例えば大司空村東南の族邑に付属した宗廟と推測される建築遺構群が知られる〔王震中 2010: 339〕。このように族邑ごとに墓地や宗廟で一族の父祖や祖先にかかわる祭祀がおこなわれていたのである。族邑を

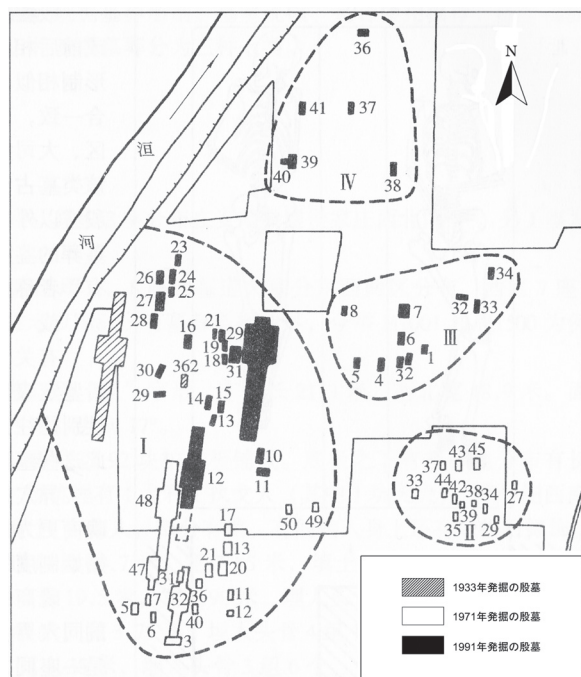


図21 殷墟後岡の族墓地（墓地内のⅠ～Ⅳグループ）
〔中国社会科学院考古研究所編著 2003: 337〕より一部改編

構成した族的集団は、祖先祭祀や父祖の墓前祭祀を通じて族邑内の一族のまとまりを維持強化した。一方で殷王朝の王室は、自らの宗廟における祖先祭祀や、王陵において挙行する殷王の父祖を祀った祭祀において、王都内の各族邑の成員を参加させることによって、王室と族邑との結束を維持強化していたことが考えられる（後述）。

3 周原の王都を構成した「族邑」群

周原遺跡では、ある族的集団が所有した祭祀用の青銅器を、多数まとめて土坑に埋納したいわゆる「窖藏青銅器」が、周原遺跡の各所に分散して発見されている⁴⁰。窖藏青銅器の埋納地点の近傍では生活址と墓地が確認されることが多く、したがって窖藏青銅器を残したそれぞれの族的集団が、その近傍に居住地と墓地を形成し、そうした「族邑」の単位が、周原遺跡範囲内の各所に分布していたと考えられてきた。

周原遺跡の発掘担当者であった雷興山らは、「族邑」の呼称をもちいずに、「居葬合一」および「居葬分離」という用語をもちいて周原遺跡の状況を説明する。雷興山らは「居葬合一」の単位とされる一つの事例について、住居、墓、工房が狭い範囲に「同時」に生活した「同じ集団」によるものであることを、層位と出土遺物から厳密に検証している〔蔡寧ほか 2022〕。一方で、雷興山らは、同一の集団がその住居と墓地を分離してつくる状況もあるとして、これを「居葬分離」と呼んでいる。後述する姚家墓地の例はこれにあたる。本稿では、雷興山らの言う「居葬合一」「居葬分離」のいずれのケースも族的集団の居住地、墓地、窖藏青銅器、さらには手工業工房などが結びついた王都内の集住単位であると考え、族邑の呼称をもちいる。

周原遺跡の発掘担当者は最近の研究で、手工業工房には大型、小型、家庭工房（自給的工房）の3形態があるとしたうえで、大型工房が集中する大きな地区を「手工業園区」と呼んでいる（本稿では工業区と呼ぶ）〔郭士嘉ほか 2021〕。工業区を構成する大型工房区の単位は、その内部がさらにいくつもの小区に分かれており、小区の一つひとつは付随する墓地の墓制の一致などから一つの族的集団の単位と考えられている。一

³⁹ 円形の祭祀遺構はほかに、小屯南地の祭祀坑 H33、大司空村の祭祀坑 71M14などが知られる。いずれも近傍の族邑に関連する祭祀遺構と思われる。

⁴⁰ 窖藏青銅器は、通常ある一族（氏族、氏族内の一部の集団や家族などの単位）が数世代にわたって所有していた青銅器群で、青銅器に銘文のある場合も多く、その内容から某一族の所有物であることがわかる。

方、工業区の全体は、複数の族的集団が互いに「地縁的」に寄り集まった組織であると論じている。小型工房や家庭工房の生産品は、族邑内あるいは都市内（周原遺跡内）で流通し、一方大型工房の生産品は王都の外へと流通したことが指摘されている。

ところで、雷興山らは「単純な居住地」、「単純な墓地」、「居葬合一」、「居葬分離」などの居住単位、墓地の単位、各種手工業工房の単位などの一つひとつを「功能区」と呼び、周原の王都を多数の「功能区」の集合としてとらえる考え方を提唱している。功能区とは、特定の機能（目的や機能）をもち、一定の期間一定の範囲内で継続し、特定の族的集団や組織に結びついた都市内の空間単位である [雷興山 2017]。これまでに知られる周原遺跡の功能区は120余りを数えるという [雷興山・種建栄 2014: 21]。発掘報告者らによる作図では、一つひとつの「功能区」は大小の面的な単位として表現されている (図22)。提唱者らはこの功能区という概念を、都市や集落遺跡の考古学調査において重要視すべきであると主張し、周原のみならず初期王朝時代の都市や集落の分析における有効性を強調しているが、本稿ではその考え方の紹介にとどめておく。

周原遺跡における「族墓地」の一例を確認しておきたい。図23は、周原遺跡範囲のもっとも東部に位置する姚家村の墓地遺跡である。墓地の全体は、西、北、南の3区に分かれ、これらは西周中期から後期に互いに並行して形成された三つの墓群であるが、三つの墓群はひとまとまりの墓地を構成していると考えられている [陝西省考古研究院・北京大学考古文博学院ほか編著 2018]。この墓地の全体は「功能区」としては「単純な墓地」を構成しており生活址はふくまれない。被



図22 周原遺跡（西周前期）の「功能区」の分布

[雷興山・種建栄 2014: 24] より一部改編

葬者の居住地はおそらく西に約300m離れた許家村北で見つかった居住区がそれであろうと推定されている。墓地の西区には大型墓が2基ふくまれる。また、西区・北区の墓は基本的に南北向きなのに対して、南区の墓は東西向きにつくられている。西区・北区と南区では墓の方位のほかに、副葬品や腰坑と呼ばれる墓壙底部の付設構造の有無においても区別があり、種建栄らは西区・北区の被葬者が「周系」の人たちであり、南区は「殷系」の人たちであると推定する [種建栄 2018]。一部階層上位の大型墓をふくみつつ族的集団の墓地を形成している点で、先述した殷墟後岡遺跡の墓地 (図21) とも共通点があり、初期王朝時代の比較的大規模な「族墓地」の特徴とはこのようなものであることが観察される。

姚家村墓地では、西・北区と南区が異なる族的集団の墓群である可能性が高い。一つの墓地が複数の族的集団の墓群からなることが推測されるのである。一方で同墓地の被葬者の居住地と考えられるのは許家村北の1カ所のみである。種建栄は一つの「族邑」に、複数の族的集団が居住していた可能性を考え、族的集団が地縁的な関係性をもって居住地と墓地を公共的な空

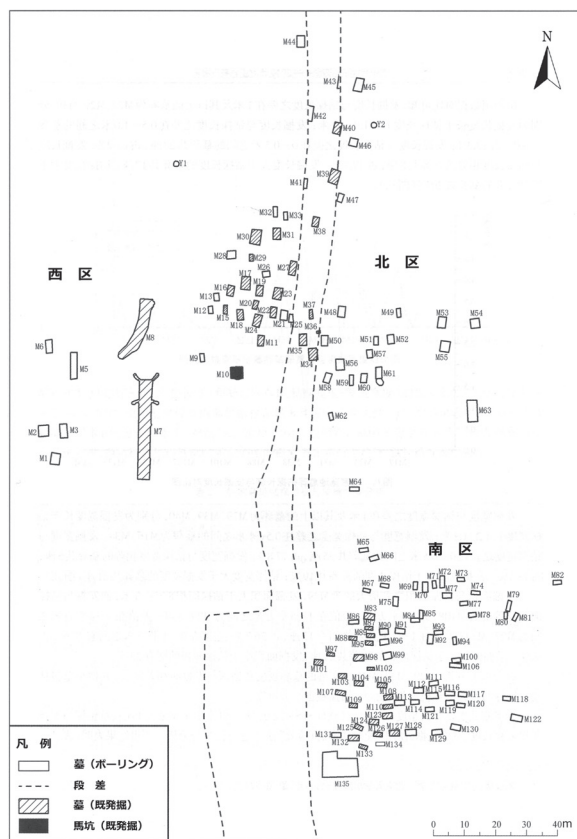


図23 周原遺跡東部姚家村の族墓地

[陝西省考古研究院・北京大学考古文博学院ほか 2018: 25] より一部改編

間として共同使用した状況を、当時の社会状況の投影として指摘する〔種建栄 2018〕。

以上、中原王朝の王都を構成した族邑について代表的な遺跡を事例に検討してみた。ところで、中原王朝の王都が、王室を取り巻く多数の族邑から構成されたと考えると、それらの族邑とは実はそれぞれ母体となる出身地もまた文化的な背景もさまざまな集団のことである。例えば周原の王都では前王朝の殷王朝と近い関係をもっていた集団が、王都のなかに族邑を形成していたことが指摘されている。また西周王朝成立前に、周の勢力が周囲のさまざまな文化的背景をもつ集団を征服して、政権のなかに取り込んでいったことも指摘できる。そうした諸集団のなかには周原の王都に族邑を形成するものもあったと考えられる。

都市のもつ普遍的性格の一つは、都市住民の多様性であろう。中国初期王朝時代にあっては、この族邑という基本となる構成単位自体が、都市の多様性を反映しているとも言えるのである。

VII 都市の住人をまとめていたもの

それでは、中原王朝の王都において、これらの族邑と族邑の集まりを、緩やかにでもまとめていた力、あるいは仕組みとはどのようなものであったのだろうか。

民族的集団やそのなかの大小の集団は、もともと血縁的紐帯を背景とした同族意識をもつ集団であったと考えられる。殷、西周時代の青銅器の銘文には一族の父祖名を入れたものが非常に多く見られ、そうした青銅器をもちいて祖先祭祀をおこなうことで、一族の結束や一族の歴史を再確認したと思われる。一方で、一族と王室、あるいは異なる族的集団の間ではどうであったのだろう。推測するに、族邑内でおこなわれる一族の祖先祭祀の場では、自分たち一族の歴史を語ることがあり、その際に王室を顕彰し、王統の歴史を一族の歴史に重ねて語ることを通じて、王室と一族との一体性を一族内で確認することがおこなわれていたようである。また、異なる族的集団の間においては、王室が主宰する王室の祖先祭祀に参加することによって、王朝内の構成員としての意識が確認されていたのではないだろうか。

そのうえで注目されるのは、祖先祭祀とは異なる祭

祀の存在である。近年西周時代の周原の王都で発見された「社祀」に関連すると思われる遺構は、その注目すべき例である。先に新石器時代後期の「早期都市」において、「天」「地」の自然神を祀る祭祀が、ときには地域的な社会の住人を広く巻き込んで大規模におこなわれた可能性を指摘した。初期王朝時代の王都では、こうした自然神系の祭祀は、関連する遺構から見て、王室を中心として比較的小さな規模で、おそらくは王都内の限られた住人が参加する空間において実施されたと思われる。王都の住人とは、血縁的背景も、ときには文化的背景も異なる多様な族邑の住人たちであった。周原の王都で発見された「社祀」とされる祭祀施設は、王都の住人たちを祖先祭祀とは別の、ある種のいわゆる地縁的な関係性によってまとめる働きをしたものではなかっただろうか。

1 祖先祭祀の遺構

1976年に周原遺跡内の莊白村で、微氏出身の一族（微史家族）が所有した108点の青銅器が一括出土した〔陝西周原考古隊 1978〕〔宝鸡市周原博物館編著 2016〕。微氏の一族が居住地とした周原王都内の「族邑」につくられた「窖藏」に保管されていた窖藏青銅器である。そのなかに「史牆盤」と呼ばれる284字の長銘をもつ青銅器（西周中期共王時代の作器）がふくまれていた。その銘文の前半は、文王から穆王までの歴代周王の事績について記し、青銅器製作時の周王である共王が、祖先王の保護を受けることを祈念する。銘文の後半では、作器者（史牆）微氏の一族6代の事績を記す。微氏は、もとは殷王室に従った氏族であったが、その一族が殷王朝滅亡時に周の武王に朝見し、武王は弟の周公に命じて「周」の地（おそらく周原の王都のこと）に、微氏一族の住地を与えたことを記す。銘文の末尾は、西周青銅器に定形的な言いまわしをもちいて、「天子の輝かしい大命に應えて、よって貴重な祭祀用器（史牆盤）を作った。烈祖と文考が必ず私（史牆）に繁栄・柔いだ福・幸福の恵・長寿・長生を授け、私がその君主に慎んで仕えるように。万年もの間、永くこの器を宝として用いるように。」⁴¹と結んでいる。

史牆盤の銘文内容に関して、つぎの3点に注目しておきたい。①青銅器は、一族の祖先の名前と祖先を称

41 池澤優記（「59牆盤（史牆盤）」『中国法書選 1 甲骨文・金文』二玄社、1990年、123-124頁。

える言葉を書き入れた祭器であり、一族の祖先祭祀において重用される宝器として作られた。②銘文では王朝以前にはじまる代々の周王の事績を顕彰しながら、つづけて一族の祖先の事績を王室の歴史に重ねて語ることで、王室と一族の一体性を強調している。③ある族的集団（史牆盤の場合は、もとは殷王朝の貴族）は、周王の命によって、周原の王都の一角にその居住地を与えられたことを記している。以上3点のうち、①は、多くの西周青銅器に類似例が指摘できる一般的なことである。②は、長銘をもつ西周青銅器銘文において他にも例がある。③は、史牆盤に特徴的な記述ではあるが、周王に従った多くの族的集団は、この記述のように周王の命を受けて、王都のなかに一族の居住地（族邑）を与えられたものと考えられる。その際には、何らかの官職を得ること、また手工業などの都市内の生産活動に参加することが前提となったのであろう。西周王朝の王都を構成した「族邑」とは、このように国家の政治的判断によって設置が許可された存在であった。多様な人びと、多様な集団が、都市の求心力（経済、情報、文化）に引かれて自らの意志で移住し、都市人口の一部となるという経緯のものではなかった。夏王朝、殷王朝の王都においても同様のことがあったであろうと推測される。

青銅器は、ある氏族的集団に属する大小の族的集団や家族の所有物であり、祖先祭祀の象徴となる祭器であった。各族邑ではそれぞれの父祖に対する祭祀を通じて一族の結束を繰り返し確認していた。一方、青銅器は、周王による一族への賞賜や官職の任命などを契機として王室が管理する工房で作られることが普通であり、したがって青銅器を製作し、そこに付せられた銘文の言葉を一族で共有すること自体が、王室と族邑の一族との結束と秩序関係を背景としたものであった。また、上記した史牆盤の銘文からうかがえるように、一族代々の祖先と王室代々の祖先を重ねた語りによって、王朝と一族との一体性を確認したと思われる、それはまた王室が各族邑（あるいは外地の諸侯に対しても同様に）に求めるところでもあった。一方、王は王都の宗廟において王室の祖先祭祀を挙行し、そ

こにはまた各族邑の代表者が参集したと想像される。族邑内の祖先祭祀は、族邑内の血縁的紐帯を維持強化する行為であり、一方、王室の祖先祭祀に各族邑が参加することは、出自の異なるさまざまな族邑が一堂に会して王室祭祀の場を共有することで、王室と各族邑、族邑と族邑との連帯におおきな役割を果たしていたと推測される。

青銅器銘文が存在していない夏王朝や殷王朝前期においては、上記の状況を示す根拠を指摘することはむずかしい。しかし、殷王朝後期の殷墟においては、大量に出土した甲骨文において、王による祖先祭祀がきわめて重要な祭儀として頻繁に繰り返されたことが知られる。それらはおそらく殷墟の宮殿・宗廟区で挙行されたほかに、殷墟北部の西北岡に造営された王陵区において、王の父祖の墓前で、大量の人あるいはウシ・ウマをはじめとする動物犠牲をとまなう祭祀として繰り返されたことが知られている⁴²（58頁、図16）。この祖先祭祀にはすくなくとも王都内の族邑の住人たちが参加したことであろう。また王が埋葬される際の葬儀においては、さまざまな族邑の出身者が、王墓の墓壙内に殉葬されることもおこなわれた[持井 1981][岡村 2008: 212]。後者は祖先祭祀ではないが、父祖の祭祀が繰り返される王陵の空間に、族邑の構成員が参与していたことを物語る現象である⁴³。

2 社祀の遺構

中国初期王朝時代において、王都で挙行された祭祀としては、祖先祭祀以外の祭祀も知られている。一つは農耕に関連する儀礼であろう⁴⁴。また、さまざまな自然神を対象とした祭祀というものがある[魏建震 2008: 20-21]。後者のなかで、初期王朝時代にしだいに重要性を増し、制度化されたと思われるものが「社祀」である。社祀とは土地神を共同で祀る行為を通して、同じ土地に住む成員間の連帯を維持強化する働きのあった祭祀の一形態と考えられる。王都内に多様な血縁的背景をもつ集団、多様な文化的背景をもつ集団が「族邑」をつくっていた中原王朝においては、そうした多様な集団を束ねるある種の地縁的な結束が必要

42 甲骨文の研究から、殷墟に王都があった二百数十年の間に、王陵区などで13,052人の人の犠牲があったとする推算もある[胡厚宣 1974]。

43 なお、西周時代の王陵は発見されていないが、既知の大型墓の状況からみて、西周時代に殉葬という行為は基本的におこなわれなくなっていたと思われる。

44 殷墟遺跡では宮殿・宗廟区の貯蔵穴から出土した農具の石鎌が総計3,640点発見されているとの指摘もある。王室が挙行して各族邑が参加した収穫に関する農耕儀礼があったことを示唆している[岡村 2008: 240]。

とされたと考えられるのである。社祀とは、血縁とは別の原理で人びとの結びつきを生み出す祭祀であり、王都の人口拡大、王都の多様性の進行とともに、しだいにその重要性を増していった祭祀であったと推測される。

戦国時代の文献である『墨子』明鬼下には、夏殷周時代の聖王たちは都を建設するにあたって、祖先の「宗廟」を造営し、同時に「社」を立てたことが述べられている。戦国時代以降に完成した文献とされる『周礼』春官では、王都、国都のすがたとして「右社稷、左宗廟」と述べ、『考工記』にも同じように、「左祖（宗廟）、右社」と見える。戦国時代の頃までには、王都、国都のあるべきすがたとして、左（東）に「宗廟」、右（西）に「社（社稷）」を配置するものと語られるようになっていたのである。

初期王朝時代の都市遺跡に関する考古学的知見からすると、祖先祭祀（宗廟における祭祀）と土地神の祭祀（社における祭祀）という2系統の祭祀施設が、対になって都市の基本骨格の一つとなるという考え方が、夏王朝、殷王朝をへて西周王朝の時代にはその雛形が生まれていたように思われる。

「社」とは『説文解字』に「社は地主」とあるように土地神のことで、甲骨文や青銅器銘文にみえる「土」の字が「社」の原形とされる〔松井 2013〕。伝世文献では、土地神の依代となる樹木、石、封土などが社祀の対象となったとされるが詳しいことはわからない。初期王朝時代の社祀の遺構としてしばしば指摘される例として、江蘇省銅山丘湾遺跡がある（図24）。中央の立石とその周囲の人や犬を犠牲とした埋葬からなる祭祀遺跡で、殷王朝後期の一地方の集落に付随した祭祀遺跡と考えられている〔南京博物院 1973〕〔俞偉超



図24 殷代後期の社祀遺構（江蘇省銅山丘湾遺跡）
〔南京博物院 1973: 図版6〕

1973〕。規模は小さいが集落内に石柱を立てた例は、早くは新石器時代中期の仰韶文化半坡遺跡でも見つかっている。この例を仰韶文化の社祀の遺構であり石柱は社主であるとする指摘もある〔魏建震 2008: 72〕。石柱を立てて土地神の依代とし、集落の祭祀空間とする信仰が新石器時代中期にはおこなわれていたと考えられよう。こうした信仰形態が、殷王朝後期の銅山丘湾遺跡の石柱にも受け継がれているのであろう⁴⁵。社祀は新石器時代以降、初期王朝時代に受け継がれた自然神を対象とするさまざまな信仰体系のなかの一つとして継承されたと考えられる。そして後述するように社祀は、西周時代以降にいたって、祖先祭祀の宗廟と対となり王都で挙行される国家的祭祀の一つとして整備されたようである。

中原王朝の王都遺跡では、鄭州商城内城の東北部に発見された6個の石塊を並べてその周囲に人や犬の埋葬をともなう遺構群が社祀の一種ではないかと指摘されているが〔郝本性 1992〕、異論もある〔王震中 2010: 240〕。石柱や石塊をもちいた祭祀の例として指摘できるものはこれ以外にはないが、その他の状況から社祀に関連すると指摘されているものは少ない。偃師商城の宮城内の東西に並ぶ祭祀B区・祭祀C区を、対になった祖先祭祀と自然神祭祀の遺構と考え、一方、祭祀A区を社祀遺構とする解釈がある〔宋鎮豪 2003: 161〕。また、殷王朝中期の洹北商城1号基址西側の西配殿を「社壇」とする説〔王震中 2010: 71-72〕、あるいは殷墟の小屯丙組建築址群を社祀とは祭祀対象が近い「四方」、「四土」を祀る遺構とする説〔王震中 2010: 386-394〕などがある。これらの諸説では、柱穴をもたない平坦な建築基壇、つまり屋根がなく天地に直接開かれた祭壇的な施設であるという特徴から、社祀に関係すると推測されることが多い⁴⁶。

2014年、西周時代の周原遺跡において「社祀」の遺構とされる大型の建築基壇址（F3）が発見され注目された〔周原考古隊 2015〕〔曹大志・陳篠 2015〕。この建築基壇址の全体は「回」字形の版築基壇（2,800m²余り）とその中央部のやや低くつくられた「庭院」（東西27m余り、南北22m余り）とよばれる方形の区画からなる（図25左）。庭院の中央西寄りには、長方形に石を敷き詰めた区画をつくり、その北辺に立石（一

⁴⁵ なお、銅山丘湾遺跡の年代については最近、殷後期文化の「遺風」が地方において残留した現象であるとの判断から、西周時代にする遺跡であるとする意見もある〔李宏飛 2020〕。

⁴⁶ なお、先秦時代の「社」に関する先行研究については、魏建震が幅広く整理している〔魏建震 2008〕。

部調整加工した長方体で、頂部は破損。現存する高さは約1.89m)を安置していた(図25右)。基壇址F3の全体は、立石を中心とした建造物で、発掘担当者らは「社祀」とであると推測している[曹大志・陳篠 2015]。先述した銅山丘湾遺跡の「社祀」遺跡との明らかな相似性も指摘できる。この建築基壇址は、これまでに発見されている西周時代の建築遺構の単体としては面積が最大のものである。

F3は、その北側にあって1970年代に発掘された宗廟遺跡とされる鳳雛甲組建築址と乙組建築址、およびその東側に並ぶF4基址、さらには甲組建築址の東方で近年発見されたF6~F10の建築址群とは、すべて同じ方位特性をもって建ち並んだ関連建築群(鳳雛建築群)を構成している。さらに言えば、左(東)に「宗廟」、右(西)に「社」という伝世文献が語る配置関係を彷彿とさせるすがたが、この鳳雛建築群の構成に見て取れるようにも思われる。

先に述べたように、周原遺跡では最近になって内外二重の城郭および内城内の宮城が発見された。鳳雛建築群は王都の内城中央北部、宮城内の中央部に位置し、ほぼ内城・宮城の中軸線上に配置されていることに注目すべきであろう(60頁、図18)。宗廟と社祀という異なる2系統の祭祀施設をふくむ鳳雛建築群が、周原の王都建設の当初から、王都の中枢部を構成していたと解釈できるであろう。

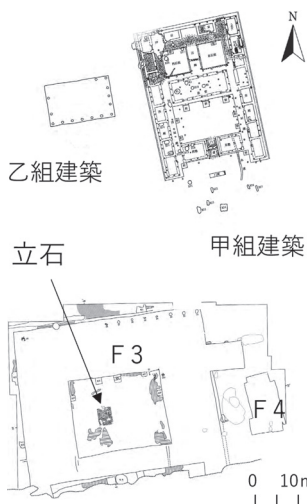


図25 左：鳳雛建築群

[宋江寧 2016: 56] より一部改編

右：建築址 F3 中央の社祀基壇と立石

[周原考古隊 2015: 16、17]

VIII 中原王朝王都の選地思想

藤本強が平易に解説するように、西アジアやヨーロッパの都市は、おもに交易を通じて地域の経済と生活の中心となる「市」を核として成立したが、東アジアの都市は、おもに政治と管理の中心となる「都」をもとに成立したものであった。藤本は、ユーラシア東西の違いを強調して東アジアの都市をとくに「都城」と呼ぶ[藤本 2007: 9-39]。中国史上においても首都・王都をふくめて主として経済的要因から生成された都市は、中世の宋代以降には一般的となる。しかし、初期王朝時代から隋・唐時代にいたる古代王朝の王都をはじめとする都市は、その当初の建設自体がきわめて政治的な判断によって開始されるものであった。典型的には王朝の交代が起きたとき、前王朝の王都・首都は廃棄され、新たな王都は、前王朝の王都とは別の土地に、しかも通常その建設前には都市も拠点の集落もなかった空白に近い土地に建設されることが多かった。本章では初期王朝時代の王都が、おもに政治と管理の中心としての都市として建設に着手されたことを、王都建設の経緯(おもに王都の場所の選定)から考えてみたい。以下では、伝世文献や同時代の青銅器銘文(金文)などの史料が比較的豊富な西周王朝の王都を中心に検討する。

西周時代には、周原(王朝以前からの周の都市)、豊鎬(王朝成立前後に建設された都市)、洛邑(成周)(西周王朝初期に建設された都市)の三つの王都が並び立っていたと考えられている。三つの王都は、周原と豊鎬が約90km、豊鎬と洛邑(成周)が約350km離れているが、互いに安定した陸上交通路・河川交通路で結ばれて、王朝の「畿内的地域」(後述)を形成していたと推測される[西江 2022](図26)。王は必要に応じてこれらの3都市を往来することがあった⁴⁷。これら三つの王都は西周時代を通じて並び立ち、それぞれ異なる役割をになって王朝の政治、宗

47 谷秀樹が西周青銅器銘文中に見える周王の「所在地」に関する記載を集成した結果によれば[谷 2014]、西周前期(「周」3、「宗周」12、「成周」13)、西周中期(「周」25、「宗周」7、「成周」2)、西周後期(「周」29、「宗周」8、「成周」8)となる。「周」を周原、「宗周」を豊鎬、「成周」を洛邑(成周)と想定するならば、周王は各種の政治的宗教的活動にともなう、畿内的地域の三つの王都間を往き来していたことがうかがわれる。

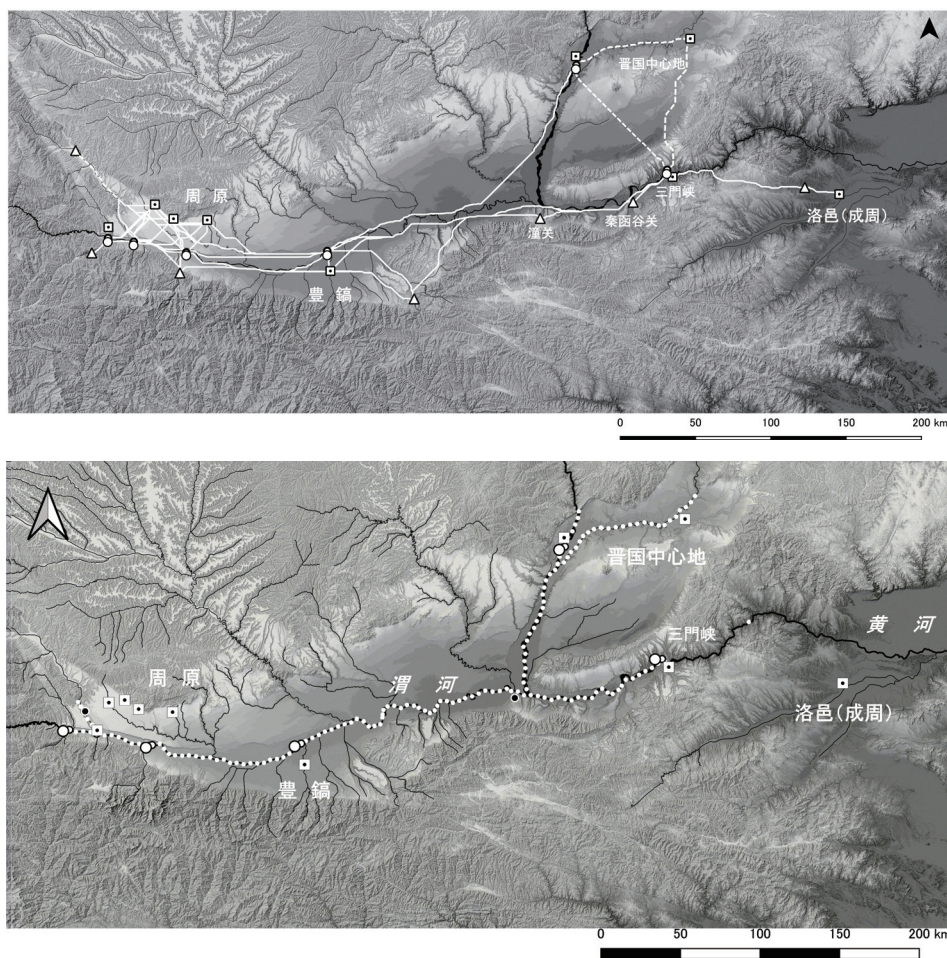


図26 西周王朝の三つの王都を結ぶ交通路（上：陸上交通路 下：河川交通路）

[西江 2022: 205、202]

教、経済の中心となっていた。筆者が「畿内的地域」と呼ぶような王朝の管理が直接的に及んだと考えられる政治圏を形成していたと思われる。

これら三つの王都のなかでも、洛邑（成周）については、その場所の選定や王都の造営について、伝世文献中に関連記載が見いだされ、また西周前期の青銅器である「何尊」等の銘文にも貴重な記述がある。これらの史料に依拠しながら、これまでも洛邑（成周）の建設をめぐる多くの歴史研究がなされてきた [李学勤 1995: 201]。

1 周原の建設

周原は周が殷王朝を倒して西周王朝を開く前からの周の本拠地であり、近年の理解では王朝成立前後に第

2の王都の豊鎬、第3の王都の洛邑（成周）が建設されてのちも、周王朝の本拠地としての役割を担う王都の地位を維持していたとみられている。王朝の祖先祭祀、朝廷儀礼などに深くかかわる都市であった可能性が指摘できる⁴⁸。

古公亶父（太王）と彼が率いた周の人びとは、関中平原北部の岐山の麓にあった「周原」と呼ばれる豊かな土地を見出し、そこへの定住をきめたという伝承が、『詩経』大雅・緜に見える。すなわち、「古公亶父、来朝走馬、率西水浒、至于岐下、爰及姜女、聿来胥宇」（古公亶父は朝に馬を駆り、西水のほとりから岐山の麓に至り、姜の女と居住地を視察した）⁴⁹とあり、またその土地の豊穡なことを讃えて「周原膠膠、萁茶如飴」（周原は肥えて、萁や茶は飴のように甘い）と述べ、

⁴⁸ 西周青銅器の研究を通じて角道亮介は、「周原の性格は青銅器銘文中に出現する「宗周」の性格と一致する」と論じ、豊鎬の王都等と比較して、その祭祀の中心地としての性格を強調している [角道 2014: 134-161]。周王朝の祭祀あるいは朝廷儀礼の中心としての周原遺跡の性格については、比較的多くの研究者が共有する認識かと思われる。

⁴⁹ 『詩経』の訳文として石川忠久『詩経下』明治書院、2000年などを参照した。

さらに場所を厳選して宮室を築くことにふれて、「爰始爰謀、爰契我龜、曰止曰時、築室于茲」（されば計画し、亀甲の占いをしてみよう。止まれ住むがよい、宮室をここに築くがよい）とある。古公亶父とは、殷を倒した西周王朝第1代の武王から数えて3世代さかのぼった（古公亶父—季歴—文王—武王）周の指導者のことである。『史記』周本紀には、北方^{ひん}の邠に定住していた周の一族が、古公亶父に率いられ、戎狄の侵略をのがれるように関中平原へと南下し、岐山の南麓、周原の地に移り住んだ経緯が簡潔にまとめられている。周と呼ばれることになるこの人びとは、新たに定住した周原の地を拠点として政治、経済の基礎を築き、やがて文王、武王の時代に、はるか東方に勢力をもつ殷王朝に対峙する一大勢力へと成長したのである。

『詩経』大雅・緜の語るところでは、古公亶父らは、岐山の麓で豊かな土地に出会い、姜女（おそらく古公亶父の妻のこと。姜は周一族と婚姻関係を形成した異姓の氏族）とともに土地を観察し、「占卜」をおこなって場所を選定しているのである。占卜をともしう土地の選定は、後述する洛邑（成周）の建設にふれた伝世文献でも伝えられる重要な行為であった。土地と地理環境の観察では、おそらく第一に、水資源を調べ、同時に農耕地としての適性を確認した⁵⁰。第二に、社会的な視点からの地理空間の評価があった。例えば、岐山南麓の周原遺跡一帯は、岐山山麓を背後にした高位の地勢的位置にあって、王都から南側の低位の平地集落群を眺望する「社会的な景観」を意識していた可能性が指摘できる（図27）〔西江 2019a: 145–148〕。

考古学的な分布調査から見て、古公亶父らの周の集

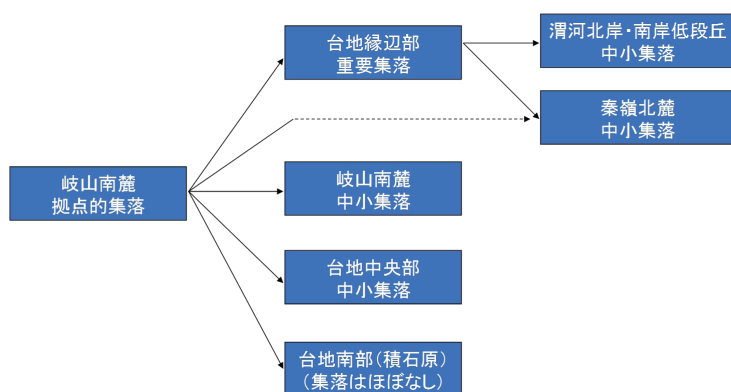


図27 周原の王都周辺の眺望関係と集落の階層性

〔西江 2019a:148〕

団が岐山南麓の周原に定着する前の時期、この一帯には顕著な拠点集落は存在していなかった。新石器時代後期ののち、中原地区に夏王朝が栄えた前二千年紀前半、周原の黄土台地は人口稀薄で少数の集落が点在するだけの土地となっていた。前二千年紀後半の前13世紀頃、殷系統の集団が一時期この地に定着したが長くは続かなかった。前12世紀頃、古公亶父に率いられた周の人びとが岐山南麓の周原の地に居住地を定め、空白の土地に近かった黄土台地の開発を進めながら、周原遺跡の場所に計画的な王都の建設を開始したと考えられる〔西江 2019a〕。

2 豊邑・鎬京（豊鎬）の建設

古公亶父の孫にあたる文王は、『史記』周本紀などによれば関中平原内外のさまざまな諸集団を服属させて周の勢力を拡大し、東方の殷王朝に対峙する実力を形成した。多様な文化的集団を統合していく勢力拡大の過程は、考古学的には関中平原の土器諸系統の動きに反映されている〔西江 2019a: 351–374〕。

文王はその晩年に、周原のあった関中平原西部から関中平原中・東部へと進出し、この方面で勢力をもっていた崇国（殷王朝と文化的にも政治的にも近い関係にあった集団）を倒して、現在の西安市西郊を流れる灃河の西岸に豊邑（豊京）を建設した〔史念海 2001: 682〕。文王の豊邑は、征服した崇国の拠点集落を直接継承することなく、同じ地域内の未開発の別地に建設した都市であった。やがて文王の子の武王が、東方の殷王朝を倒して西周王朝を開始するが、その前後に灃河の東岸に鎬京を建設した。今日、豊鎬遺跡として

知られる大規模な遺跡群は、灃河の西岸と東岸に文王、武王が相ついで建設した豊邑と鎬京を合わせた第2の王都遺跡のことである。

関中平原の地形的特徴として、渭河とその南側の秦嶺山脈北麓と間には広い平地が少ない。そのなかで唯一、現在の西安市周辺だけが秦嶺北麓の扇状地状地形とその北側の黄土塬および沖積平野が連続した比較的広い平地地形を形成しており、渭河支流の中小河川が流れる良質な水資源を有する土地となっている。ただし、豊鎬の王都周辺の比較的狭い平地は好条件の可耕地であるが、関中平原の

50 『詩経』の各篇には、しばしば湧水地（泉）について語るところがある。また、そもそも周一族の拠点となった「周原」という地名の原義が、岐山山麓の崖下の泉を表す可能性に言及した松丸道雄による指摘がある〔西江 2019a: 32–33参照〕。

中・東部全体でみると、土地改良がすすむ以前の西周時代において可耕地は限定的であり、新都市の人口を維持することは可能であっても、拡大発展させるような農業基盤があったとは言えない〔西江 2019a: 103–124〕。豊鎬の土地が王都の一つとして選択された理由は、土地の豊かさや農業経済の可能性にあるのではなく、なによりも関中平原の中・東部に位置して、東方の殷王朝に対峙することを考えた政治的な判断であったと思われる。

豊鎬遺跡の所在する灃河兩岸地帯は、新石器時代中期の仰韶文化、後期の龍山文化の集落址は多く知られるが、前二千年紀前半の夏王朝の時期（二里头文化並行期）には空白に近い土地となっていた。前二千年紀後半、殷王朝に近い崇国の勢力下におかれた時期にも、灃河兩岸の土地はほとんど利用されず、住民は稀薄であった。文王、武王はそうした空白に近い土地を選択して、豊鎬の王都を建設したのであった。

3 洛邑（成周）の建設

殷王朝を倒した周の武王は、旧殷王朝のつよい影響下にあった黄河中・下流域の広大な土地を周王朝の政治圏として確立するために、本拠地の関中平原を離れた東方の地に、第3の王都（東都）を建設することを考えたと思われる。そうして建設されたのが洛陽盆地の中央に立地する洛邑（成周）⁵¹であった。

洛邑（成周）の建設は、殷王朝を倒した直後に武王によって着手されたが、武王は西周王朝開始後、数年にして没した。つづいて即位した成王（武王の子）の初期に、摂政となっていた周公（武王の弟）らを中心に王都の建設は継承され、おそらく成王5年頃に完成したと考えられる⁵²。

武王による洛邑の建設は、最初に政治と地理に関する大きな展望をもって、それにふさわしい地方を選択し、そのうえで現地の地勢を観察して、具体的な候補地の選定をおこなった。伝世文献の一つである『逸周書』度邑解には、「自洛汭延于伊汭、居易無固、其夏之居、我南望過于三涂、我北望過于有岳、丕願瞻過于

河、宛瞻于伊洛、無遠天室」とあり、『史記』周本紀にはこの一文をリライトしたと思われる記述がある。『逸周書』と『史記』の地理的記述の解釈には諸説あるが〔劉余力 2020: 27–29〕、その要点は、太行山脈、黄河、嵩山など「中原地区」周辺を広く俯瞰するような視点から、伊河、洛河の北の平原、すなわち洛陽盆地に注目し、この地を洛邑（成周）建設の適地として選定したということである。

武王の没後、成王在位の初期に継承された洛邑（成周）の建設事業は、周公が中心となって進められた。そのときの都市の選地の経緯については、伝世文献の『尚書』召誥・洛誥、あるいは『史記』周本紀にも記述が見える。『尚書』洛誥では、周公の言葉として、「我河朔の黎水の上をトし、我乃ち澗水の東、灋水の西をトせしに、惟れ洛食す。我また澗水の東をトせしに、亦た惟れ洛食す」⁵³とある。このように、洛邑（成周）の建設地を決定するにあたって、周公はまず「黄河の北の黎水のほとりを占い」、その後「澗水の東、灋水の西」（澗水、灋水は今も洛陽市街地を流れる中小河川）の地を占うと吉とでた。さらに、「灋水の東」の地もまた吉とでた、というのである。王都の建設地は周公のこれら一連の占卜の結果を受けて決められたのである〔劉余力 2014: 79〕。このときに選ばれた場所が、近年、西周時代の生活遺跡、手工業遺跡、墓地などが集中して発見されている灋水の東西兩岸一帯なのであろうと推測される。ただし洛陽市の西周遺跡は、多くが現代の市街地と重なることもあって、都市遺跡の全体像は明らかではない。以上のように王都の場所の選択においては、地理的な条件を考え、土地を観察して、適地を占卜という儀礼的な行為を通じて選定したのであった。神と交信する占卜という儀礼の行為を通じて、王は人びとに対して王都選定の根拠を宣言したのであろう。

洛邑（成周）が建設された洛陽盆地は、黄河中流域のいわゆる「中原」の中央に位置する土地である。かつて二里头文化の時期に、洛陽盆地の二里头遺跡（推定される洛邑（成周）から東にわずか20km）には夏

51 洛陽の地に建設された西周王朝の都市について、伝世文献には洛邑、成周、新邑、あるいは王城などの名称が見られ、これらの名称の指し示すものをめぐって古くから多くの議論がある〔劉余力 2020: 12–17〕。本稿では、「洛邑（成周）」という表記を用いることで、西周時代初期に現在の洛陽市一帯に建設された周の王都を指すこととする。

52 伝世文献では洛邑（成周）の建設は、武王のときと成王のときの別の2段階があるようにも読み取れ、武王時の都邑と成王時の都邑は現在の洛陽一帯の別地点という見方もある。また、武王による「克殷」ののち、何年後に洛邑（成周）が完成したのかについても諸説ある〔劉余力 2020: 34–36〕。

53 『尚書』の訳文として加藤常賢『書経』明治書院、1983年などを参照した。

王朝の王都が建設され、中国大陆の華北・華中の諸地域が、二里頭の王都を中心とした地域間関係を形成したことは繰り返して述べた。これが初期王朝時代、中原王朝の始まりであった。そのときから500年以上のときを経て、(西方の関中平原から発展した)西周王朝が、「中原」の洛陽盆地に洛邑(成周)を建設したとき、(殷王朝後期にはやや崩れていた)華北・華中の広域を巻き込んだ地域間関係の中心としての中原王朝王都の地位が再現されたとも言えよう。

先にもふれた『逸周書』度邑解や『史記』周本紀には、武王が洛陽盆地を王都の建設地として選定するに際して、この地方が、いにしへの「夏之居」の地方であることを認識していた記述がふくまれている。また、『左伝』桓公二年には、「武王克商。遷九鼎于雒邑」、つまり武王が商(殷)を倒したあとに、いわゆる「九鼎」⁵⁴を雒邑(洛邑)に遷したことが語られている。『史記』周本紀には、「成王在豊、使召公復營洛邑、如武王之意。周公復卜申視、卒營築、居九鼎焉」(成王は豊邑にありて、召公に命じてふたたび洛邑に都を営ませ、亡き武王の意に沿うようにした。周公はまた洛邑で占トをとりおこない、土地を視察して、ついには居城を築き、九鼎をここに置いた)とある。夏王朝の始祖・禹にはじまり殷王朝に受け継がれてきた「九鼎」を、周の洛邑(成周)に遷したことに言及した記述である。「九鼎」なるものが実在したのかも知りえないが、重要なことはこれら伝世文献の記載では、洛邑(成周)の建設とは、周が夏王朝、殷王朝を継承する「正当な中原王朝」であることを表明した故事として語られていることである。

1963年に陝西省宝鶏市(周原の西方の地)で発見された「何尊」と呼ばれる青銅器がある(図28)。この青銅器は、銘文からおそらく洛邑(成周)が完成した成王5年に鑄造されたと考えられ、成王が成周において亡き父武王を祀った際に、「何」と

いう人物が、成王から賜与を受けたことが記されている。比較的長文の同銘文には、洛邑(成周)の地について、かつて武王が述べたとされる王の意志表明が記録されている。何尊の銘文には、「惟れ王(成王)初めて遷りて、成周に宅り、…(中略)…、惟れ武王既に大邑商(殷王朝)に克ち、則ち廷(庭)に天に告げて曰く、『余は其れ茲の中國に宅りて、之自り民を父めむ』と。…(中略)…、惟れ王の五祀なり」⁵⁵、とある。ここに見える「中國」⁵⁶とは洛邑(成周)のあった洛陽市一帯のことで、「中央にある国」を意味する表現と考えられ、「諸国」の中心の国という意味と解される。殷王朝を倒した直後の武王が、ここ「中国」から天下を治める意志を表明した同時代の記録である。

「ここより民を治める」という表現は、他の西周青銅器銘文(「大盂鼎」など)に見られる「匍有四方」(遍く四方を領有する)という表現に通じるもので、「四方」は伝世文献中にもよく見られる表現である。『史記』周本紀では、先にふれた「九鼎」の記述につづけて、周公の言葉としてさらに、「此天下之中、四方入貢道里均」と記す。類似の記述は『史記』劉敬叔孫通列伝などにも見ることができる。洛邑(成周)の地は天下の中央にあって、四方からの貢納にあたって距離はみな等しいと評価しているのである。中心があり、四方に等距離で諸地域が広がっているという地理的空間を俯瞰したイメージである。何尊の銘文とも重なりあう



図28 何尊

[北京大学中国考古学研究中心ほか 2017: 五「何尊」]

⁵⁴ 夏王朝の始祖禹が、「九州」の原料を用いて作らせたという九つの青銅鼎のこと。夏から殷、殷から周の朝廷へと遷されたと言われる。東周時代には王権のレガリアとして語られ、周を倒した秦は九鼎を得ようとして失敗した話が伝えられる。

⁵⁵ 竹内康浩訳(『中国法書選1 甲骨文・金文 殷・周・列国』二玄社、1990年、41何尊)による。

⁵⁶ 何尊に見える「中国」の名称は、この言葉の最古の用例として知られる。

認識であろう。洛邑（成周）は天下の統治の中央に位置し、各地からの貢納において条件が等しいと、建設当時から説明されていたと考えられる。

『尚書』康誥によれば、「惟三月哉生魄、周公初基作新大邑于東國雒、四方民大和會。侯、甸、男、采、衛百工、播民、和見士于周。周公咸勤、乃洪大誥治」（三月の初めに、周公は初めて、新邑を東国の雒（洛）の地に建設しようとした。四方の国々のものたちが大いに集まり、侯・甸・男・采・衛の国々と、もろもろの役人、万の民とが、周に奉仕するために参上した。周公はこれらの人々をことごとくいたわり、そうして大いに告辞した）、とある。周公によって洛邑（成周）が建設されたとき、「四方」の諸侯、臣民らが東都の洛邑（成周）に奉仕のために参集したことを記録した一文である。

以上をまとめると、洛邑（成周）の場所の選択が、周王朝にとって殷を倒した直後の東方統治のための都市として必要とされ、その地の選択はまた、夏王朝、殷王朝につづく「中原王朝」の後継者としての正統性を象徴することとして認識され、現実の統治においては、この地は天下の中心の「中国」であり、そこから「四方」を統治する絶好の地理的位置であったと考えられたのである。

当時の洛陽盆地は、夏王朝の王都（二里頭遺跡）と、それに続く殷前期の王都（偃師商城）が廃棄されて以降の数百年間、顕著な集落遺跡は存在しない土地となっていた。この空白に近い状態にあった「中原」の中央の土地が、西周王朝第3の王都の場所として選択されたのであった。

4 夏王朝、殷王朝における王都の選地

夏王朝、殷王朝の王都建設について、伝世文献の記載は限られたもので、王都の名称や関係する王名などにとどまる。また、史料として参照できる青銅器銘文は基本的に存在しない。以下では、王都建設の経緯に関連して、先にふれたことも重なるが、考古学的知見として指摘できることを確認しておく。

二里頭の拠点集落は二里頭文化一期のときに登場した。新石器時代後期の洛陽盆地では、龍山文化の大小の集落遺跡が点在していたものの、中心的拠点は確認されていない。その状況のなかで洛陽盆地の中央部に、二里頭文化一期の文化を主体とする、中原地区では従来にない大規模な集落として二里頭の拠点集落が出現した。新石器時代後期の中原地区（黄河以南）

では、洛陽盆地の南側や東側などで小地域単位の社会が競合し、一方で中原地区外部の各地との影響関係を各小地域（42頁、図3）が受けとめる動きのなかで、中原地区全体としての統合が進み、やがてその中心となった二里頭文化の勢力が、洛陽盆地中央部に進出し、二里頭の拠点集落を建設した。これが王都の始まりとなった〔孫慧琴 2023〕。

二里頭文化一期から二里頭文化二期の頃まで、突如出現した拠点集落の周囲には、なお旧来の龍山文化の土器を特徴とする集落が存続していたことが指摘されている〔陳国梁 2019: 75〕。この状況は、二里頭の王都が新石器時代後期以来つづく洛陽盆地在地の集団ではなく、盆地の外部からの集団によって建設されたことを示唆している。

二里頭文化二期から200年余りのちに、中原地区に殷王朝が登場する。王朝開始以前の殷の人びとが担ったとされる文化は、もとは黄河以北の地域で展開しており、この文化の集団が南下して現在の鄭州市あたりに進出し、さらにその西方約100kmにあった洛陽盆地の二里頭の王都を廃棄に追いやったと推定される。この前後に、二里頭の王都の東わずか6kmの地点に建設されたのが殷王朝前期の王都となる偃師商城である。一方、現在の鄭州市一帯にもさらに規模の大きなもう一つの王都となる鄭州商城が建設された。偃師商城と鄭州商城は東西に約100km離れて並び立つ二つの王都であった。偃師商城と鄭州商城は、ともに中原王朝の王朝交代という事件を経て相ついで建設された新王朝の王都であった。それぞれの建設場所は、偃師商城ではもともと集落のない空白に近い土地であり、一方鄭州商城一帯にはもとは二里頭文化の集落が点在したが、拠点集落は見られない土地であった。

夏王朝の二里頭遺跡、殷王朝前期の鄭州商城や偃師商城などの場所は、中原王朝の王都として、華北・華中の広域を巻き込んだ地域間関係の中心地となる地理的条件がその選地の理由にあったと推測される。ところが、殷王朝後期の王都である殷墟遺跡は、黄河以北にあって太行山脈の東側に建設された都市であり、その地は中原地区の外側に位置していると言える。この地が選ばれた理由は定かではないが、この一帯が王朝以前の殷の祖先の土地に関係していることは理由の一つであろう。なお、殷王朝の前期から後期へと移行する中間期に、王朝は比較的短期間に遷都を繰り返したことが伝世文献からうかがえるが、その間の動きは考古学的にはよく把握できていない。殷王朝後期の安陽

市の殷墟の王都は、遷都を繰り返した政権動揺の結果の場所の選択であったと考えられよう。

殷墟遺跡の一带には、新石器時代後期には龍山文化の比較的大型の集落も点在していたが、その後の二里頭文化並行期から殷王朝前期において、この一带に拠点的な集落は存在していなかったことが確認できる[中国社会科学院考古研究所編著 2003: 289][中国社会科学院考古研究所・美国明尼蘇達大学 1998]。

IX 政治圏の中心としての王都

前章では中原王朝における王都建設の経緯と、建設地の選定において政権が目指したであろう地理的、政治的な条件などについて考察した。そこで明らかになったことの一つは、中原王朝においては、殷後期における王都所在地の地理的偏りをのぞくと、その政治的空間のなかで、王都を「四方」の中央におくという思考が顕著に見られたことである。中原王朝の王都は、理念的には王朝の政治圏（あるいは政治的影響圏）の広がる華北・華中の地理的な中央におかれるものと考えられていたようである。「中国」という言葉も、諸地域の中央の国を意味する言葉として西周時代には使用されていた。本章では、中原王朝の王都が、王朝政治圏の地理的空間を構成する中心となることを企図して建設されたことを、政治圏の成り立ちという別の視点から確認しておきたい。

1 二里頭文化期の中原王朝（夏王朝）政治圏の成り立ち

筆者は以前、二里頭文化期の中原王朝の政治圏について、「畿内的地域」、「二次的地域」、「外域」の3重の空間構成となっていたことを論じたことがある[西江 2014][許宏 2016a: 147-152]。そこでの要点は以下のようである。

(1) 畿内的地域

- ① 新石器時代後期以来、当該地域の考古学文化には連続性が指摘できる（同系統の文化的集団が中心となってこの地域で国家形成が進行した）。
- ② 小河川流域や盆地地形（30km 前後）[大貫 1997: 149]を地理的単位とする集落群（小地域）を形成していて、この小地域が王都との間に階層的な

関係性をつくっていた。

- ③ 二里頭の王都遺跡（300万m²以上）と、その近隣にあって王都の防衛機能を補完する大型集落遺跡（60万m²前後）などを合わせた「都城圏」が指摘でき、それが畿内的地域の中核となっている。
- ④ 集落の階層的秩序として、「王都+都城圏」を第1階層と考える。一方、上記②の小地域内にはそれぞれ一つの中心集落（30万m²前後）が見いだされ、そのような地域内の中心集落を集落の第2階層と考える。さらに、小地域内の一般の小集落（10万m²未満）を第3階層とする。このように大小の集落は少なくとも1～3階層の階層的秩序を形成していた。
- ⑤ 一方、二里頭文化の墓は、堅穴墓壇の大小とそれに相関する副葬品の質と量（青銅器・玉器の有無、儀礼用精製土器の有無、日用土器のみあり、副葬品なし、などの区分）から、王墓⁵⁷を頂点とする5等級の等級構成を読み取ることができる。このうち、二里頭の王都では、第1等級～第5等級の都市住人が確認され、小地域の中心集落では第3等級～第5等級の住人が、一般の小集落では第4等級～第5等級の住人が見られる。
- ⑥ このように、中原王朝全体の構成員の階層構成と王都を中心とした集落の階層構成とは、緊密に相関した秩序関係を構成していた。
- ⑦ 畿内的地域とは、王都・都城圏を中核かつ頂点として、王とその政権によって管理された政治的秩序が行きわたっていたと推定される地域のことである。

(2) 二次的地域

- ① 新石器時代後期以来の在地の考古学文化が継続する地域内に、外来の二里頭文化の大型集落が進出して、地域内に不連続な文化状況を生み出していた。
- ② 二次的地域に登場した二里頭文化の集落では、畿内的地域では一般的ではない防衛用の環濠を備えるなど、在地の集団との間に一定の緊張関係が生じていたことをうかがわせる。
- ③ 二里頭文化が進出して建設された拠点的な集落を「植民的拠点」と呼ぶことにする。
- ④ 中原王朝にとって植民的拠点の設置は、在地の集

57 二里頭文化では王墓として確認された墓はないが、二里頭遺跡の2号宮殿址にともなう堅穴遺構 M1が王墓である可能性については先に指摘した。

団との関係のなかで、広域の交通路を確立し、さらにはその方面の自然資源を入手することを目的としたと考えられる。二里頭文化期の二次的地域に登場した代表的な植民的拠点として、河南省南部の駐馬店楊莊遺跡、陝西省東南部の商洛東龍山遺跡、山西省南部の二里頭文化遺跡群などをあげることができる。

(3) 外域

- ① 二次的地域のさらに外側を取り巻く広大な諸地域がそれにあたる。
- ② 外域には二里頭文化の遺跡はなく、したがって二里頭文化分布圏の外に相当する。
- ③ 外域に位置する多くの地域では、地域的社會の首長層によって中原王朝王都の第2等級墓以上に見られる一部の青銅器や、牙璋（玉璋）〔西江 2021〕に代表される一部の玉器が受容されている。また、畿内的地域の第3等級墓の特徴である儀礼用精製土器（陶礼器）が、外域の首長層に受容され、模倣されるなどの現象が広範にみとめられる⁵⁸。
- ④ 外域諸地域の生産品（長江下流域の原始瓷器あるいは各地の玉器など）のほか、青銅、緑松石などの高級原材料や塩などが中原王朝の王都にもたらされていたと考えられる。
- ⑤ 二里頭の王都から遠隔地にもたらされた玉璋（牙璋）や青銅牌飾などの特異な文物は、中原王朝の

側で何らかの理由によって選ばれた文物のように思われる。二里頭文化の王都から受容した文物あるいはそれを模倣した文物は、外域首長層のあいだで中原王朝に由来する威信財とされたと考えられる。中原王朝と外域首長層との間の交流は、単なる物品の交換ではなく、緩やかな政治的關係性の意識をともなう非対称な交流であったように思われる。

以上のように中原王朝の王都は、政治圏の中央に位置するとともに、政治圏を構成した階層の頂点に位置していたのである。中国初期王朝時代の王都がきわめて政治的な成り立ちをもつことを示唆している（図29）。

畿内的地域は王都（都城圏）と、階層的にその下位におかれた小地域群から構成されることを述べたが、この小地域群の一例についての詳細な地面調査によれば、小地域内の中小集落の構成（集落数や中心集落の存在など）は、じつは新石器時代後期から二里頭文化期に移行してもその基本的構成に変化のないことが見て取れる。これが意味することは、二里頭文化の成立あるいは中原王朝の登場とは、中原地区の在地社會が基礎から解体、再編したようなものではなく、新石器時代以来の少なくとも一部の小地域単位の社會は安定して継続していたということである〔西江 2014〕。その上位に、従来存在しなかった一階層上の大規模な拠点集落（二里頭の王都）が中原地区の集落階層の頂

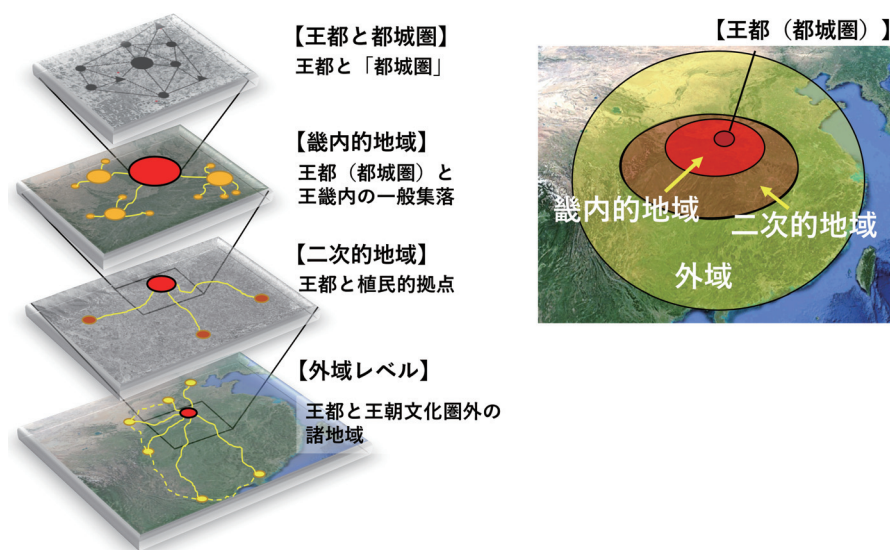


図29 中原王朝（二里頭文化期）政治圏の概念図

⁵⁸ こうした現象は、内蒙古（夏家店下層文化）、甘肅、山西、四川（三星堆文化）、上海、浙江、湖北など、長江上流域から下流域、西北地区、東北地区にいたる非常に広大な範囲で認められる〔中国社会科学院考古研究所編著 2003: 132-135〕。

点に出現し、中原地区を統合したはじめての中心が生まれたのである。集落の階層構成が一段階多層化した現象と考えることができよう。この多層化は中原地区に初期国家の政体が生成されたことの反映とみることができ、王都の出現と国家の形成との一体的な動きを示すものでもあった。中国における初期国家の形成と首都・王都の出現とは、一体的に進行した社会の動きであったと考えられる。

2 殷王朝、西周王朝に受け継がれた政治圏の3重構成

二里头文化期（夏王朝）に形作られた中原王朝政治圏の3重構成は、すくなくともその外形的な成り立ちがその後の殷王朝、西周王朝の時代にも受け継がれたように思われる。

殷王朝の前期、鄭州商城・偃師商城に王都がおかれていた時期には、「二次的地域」に該当する地域に殷王朝の植民的拠点为建设されたことが指摘できる。盤龍城（湖北省）、垣曲商城（山西省）、東下馮商城（山西省）、府城商城（河南省）、輝県孟莊遺跡（河南省）、老牛坡遺跡（陝西省）などがそれである（37頁、図1）。城壁をともなう大型集落である盤龍城、垣曲商城、東下馮商城、府城商城などは、いずれも二里岡文化期の鄭州商城と偃師商城が王都であった時期がそれぞれの盛期であり、その後、殷王朝後期に殷墟に王都が遷る前後には廃棄されている〔王震中 2010: 168、177-178、185-186、191-192〕。また老牛坡など一部の拠点集落は、殷王朝後期にも継続するが、中央政權からは距離をおいて、文化的にも在地化した地方都市として継続する現象が見られる。殷王朝前期の王都が廃棄、遷都するという中央政權の動揺に呼応して、二次的地域の植民的拠点も大きく変動したのである。殷王朝前期の植民的拠点は、中央政權の政治的目的により建設された地方都市であったことがわかる。

殷王朝後期になると山東地区など華北東部において新たに殷系の文化を特徴とする拠点集落が登場する。このときに山東地区の在地文化であった岳石文化の集団との間に、どのような相互関係があったのかわかっていないが、中原王朝の勢力が岳石文化の分布する山東地区へと東漸した状況（二次的地域の拡大）が見て取れる〔渡部ほか 2023〕。

殷墟遺跡の王都から遠く離れた山東省青州蘇埠屯において1965、66年に発掘された大型墓（蘇埠屯1号墓）

から「族記号」（氏族的集団のシンボル）とされる「亞醜」銘をもつ青銅器が出土した。王震中は、殷墟出土の甲骨文に「小臣醜」の名が見えることなどから、「亞醜」は、もとは殷王が東方の外地に派遣した武官であったが、のちに山東地区在地の諸侯へと成長し、同時に王都において「小臣」の官職を兼務したと推測している〔王震中 2010: 471〕。

族記号をもつ青銅器は殷後期に数多く知られるが、殷墟の王都で出土した青銅器の族記号と同じ族記号をもつ青銅器が遠隔地の遺跡で出土することがある。同じ氏族的集団に属する大小の集団が、殷墟の王都と遠隔地とのそれぞれに拠点をもっていたことを示唆している。例えば殷墟西区第三区の697号墓からは、「丙」の族記号をもつ青銅器が出土したが、同じ「丙」の族記号をもつ青銅器は殷墟から遠く西方に離れた山西省靈石県旌介村（図1）の墓地遺跡で34点出土している〔李伯謙 1998〕。丙族の名は甲骨文にも見えているが、かれらの本拠地が殷王朝後期の頃、山西省靈石県一帯にあったのだろうと推測される。そして同じ氏族的集団内の一家族などの小集団が、王都の殷墟に居住して、おそらく何らかの官職を与えられていたものと考えられるのである。嚴志斌のまとめによれば、殷墟と殷墟以外の遺跡から同じ族記号をもつ青銅器が出土した例として、丙、夔、戎、翼、史、卷、息の7種が確認できる〔嚴志斌 2022: 60-61〕。これらの族記号をもつ青銅器は、いずれも殷墟の王都から遠く離れた地方の墓地遺跡で集中して出土している（河南省、河北省、山東省、山西省など殷墟から数百kmないし500km前後）。おそらくは、それぞれの地方に同じ族記号をもつ氏族的集団の拠点があったのだと考えられる。そしてそれぞれの氏族的集団内の一部の集団あるいは一部の家族が、殷墟の王都に拠点（族邑）を構え、殷王室の近くにあつて官職を得ていた状況が推測されるのである。このように、ある氏族的集団が、王朝政治圏の畿内的地域ないし二次的地域内に一族の本拠地をもち、一方で氏族的集団内の一部の集団が、王朝中心地の王都に族邑を構えたという状況が考えられる。

一つの氏族的集団が王都と畿内的地域さらには二次的地域に2カ所あるいは3カ所の拠点をもつという状況は、つぎの西周王朝においても明確に指摘でき、ここでは「封建」という統治の形式をとりながら、王都と畿内的地域におかれた拠点、そして二次的地域に「封建」された「諸侯国」の関係性へと受け継がれたよう

である⁵⁹。

殷墟の甲骨文中には「四土」の表現が現れるが、一般的に殷王朝「王畿」（筆者の言う畿内的地域）の外側の地域を指す概念とされる。この殷王朝の王畿と四土の関係は、西周王朝についての伝世文献に見える「内服」と「外服」という概念に対応している〔王震中 2010: 465〕。西周王朝における内服、外服とはさらに、「三事」と「四方」という対の概念にも対応している。西周王朝政治圏の基本にかかわる三事と四方の実態について、伝世文献や「令方彝」の青銅器銘文から論じた佐藤信弥の研究〔佐藤 2016: 50–52〕によれば、以下のようにまとめることができるであろう⁶⁰。

①「三事」とは、諸官が統轄する周王朝の直下の範囲、すなわち「王畿」内をさす。②「四方」とは、王畿の外側の東西南北の四方のことで、周王朝の外地をさす。③王朝の内地である王畿内の地域を「内服」、外地を「外服」と呼ぶ。④内服の地すなわち王畿内には、王と官が直接統治する都邑やそれに準ずる邑のほか、その周辺の地域では周王に仕える貴族に采邑が与えられ（「邦君」）、「しばしば采邑の主が王朝の高官となった」。⑤外服の地は、「封建」された「諸侯」が管轄する地域であった。

①～③のことは、西周王朝の政治圏が、三事（内服）と四方（外服）の内外2重の構成となっていたことを示している。この内外政治圏の成り立ちは、筆者が二里头文化期について考古学的に推定する「畿内的地域」と「二次的地域」の構成に対応するようであり、その政治圏の構図が、その内実を変化させながらも殷王朝、西周王朝へと継承されたものと考えられる。

西周王朝の封建とは、周王により畿内的地域に拠点をもつ諸侯を立てて、征服した遠隔地の「領土」を分け与え、間接統治した仕組みである。このとき土地のみならず、諸侯に従属した畿内的地域内の采邑の住民あるいは封建現地の在地住民などもまた、形式的には周王から分与されたものと理解されたのである。封建の実態を語る伝世文献や出土文字資料はけっして多くはないが、西周前期の青銅器である「宜侯矢簋」（江蘇省丹徒出土）、「克罍」（北京市出土）などの青銅器銘文は封建の事情の一端をうかがわせる例としてあげられる。後者は燕国の初封地と考えられる北京市の琉璃河遺跡（図1）で出土した青銅器で、銘文には太保

（召公奭^{しょうこうせき}）の近親者（おそらく子息）の「克」という人物が、周王から「匱（燕）に侯となれ」と命じられ、官吏たちとともに封建の土地へと入ったことが記されている。燕国のように王都から「四方」の遠隔地に封建された諸侯国であっても、諸侯の出身母体の氏族的集団内の関係性は少なくとも西周前期頃には明確なものであった。同じく琉璃河遺跡出土の青銅器「董鼎」の銘文には、燕侯に命じられた董という人物が、宗周（豊鎬あるいは周原）に赴き、（一族の長の）太保（召公奭）に貢納品を献上したことが記されている。こうした記録からうかがわれるのは、ある氏族的集団はいくつかに分岐して、そのある集団は畿内的地域の王都に居住して（族邑）王室近くで官として勤め、ある集団は王都周辺の采邑を得て一族の経済基盤に貢献し、ある集団は周王の命により遠く四方（二次的地域に相当）に封建されて諸侯国を経営した。このように少なくとも王室の政治力が強勢だった西周王朝前期においては、一つの氏族的集団は、王都（王都内の族邑）―畿内的地域（采邑あるいは一族の本拠地）―二次的地域（封建された諸侯国）に分かれた場合も、一族の血縁的紐帯によって互いに連携することで、王朝政治圏の統治システムを維持していたと考えられるのである。

燕国の琉璃河遺跡では、土器や墓制の特徴から、この地方都市の成員として、①西周王朝中央から移り住んだ周系文化をもつ支配層、②旧殷王朝の流れをくむ人びと、③在地の土着文化の人びと、以上の3グループが共存していた状況が指摘される〔劉緒・趙福生 1997〕。西周時代の封建諸侯国の地方都市における都市構成員の成り立ちを示す事例と言えよう。一つ強調しておきたいのは、琉璃河遺跡の支配層の土器の特徴が、単に漠然とした「周系の土器」なのではなく、西周前期の王都・豊鎬を中心に成立して間もない「西周式土器」〔西江 2019a: 375–393〕にきわめてよく一致するという事実である。西周式土器とは、西周文化圏内で斉一に普遍化していたものではなく、中心地の王都で成立した、王都に典型的な土器様式である。王都の西周式土器が、遠隔地の北京市近くに、封建による支配層の移住とともに直接移入されていたことになる。封建された諸侯国支配層の来歴を反映した現象であり、王都と封建により誕生した地方都市との間の人や情報の動きを反映した現象である。

⁵⁹ 角道亮介は同様の視点からこのような問題に言及している〔角道 2014: 256〕。

⁶⁰ なお、三事と四方についての先行する研究として伊藤道治〔1987: 231–248〕がある。

西周王朝の時期における「外域」に相当する地域については、伝世文献や青銅器銘文からその実態を知ることが難しい。考古学的には、西周文化圏の外にあって、西周文化圏と境界を接する在地の文化伝統をもつ地域的集団が展開した「外域」が広がっていた。例えば自然資源として青銅原料が豊富な長江中流域の両岸地帯は典型的な外域にあたる。同地方は二里頭文化期の頃より一貫して在地の集団が中原王朝と交流をもちつつ土着の文化（呉城文化など）を展開させ、春秋戦国期以降いわゆる「越式青銅器」と呼ばれる東南地区に独特の文化を形成したが、やがて拡大する楚国の影響下に入ることになる。また、長江上流域の四川盆地では、二里頭文化期から殷王朝の時期を通じて三星堆文化が栄え、夏王朝、殷王朝と緩やかに交流したが、殷末周初の頃には三星堆文化にかわって同じ四川盆地に生まれた金沙遺跡（成都市）を中心とする十二橋文化が台頭した。十二橋文化は、西周王朝と交流して王朝の畿内的地域との境界域にまで進出し、活動的な接触地帯を形成していた〔西江 2016〕〔西江 2019a: 395–438〕。三星堆—十二橋文化の系統は、四川において変化しながら継承され、春秋戦国時代にはいわゆる「巴蜀式青銅器」と呼ばれる独特の考古学文化を形成したが、やがて北から拡大してきた秦国の支配下にはいった。初期王朝時代の外域にあたる長江流域の諸地域は、春秋戦国時代に楚国や秦国の勢力が拡大するなかで、筆者の考える「中国」的文化領域のなかに組込まれ、秦・漢帝国の時代には「中国」的世界の地理的な一部を構成する地域となっていた。初期王朝時代の「外域」がたどる歴史の一側面である。

X おわりに

以下では本稿で述べてきたことの要点を整理しておきたい。

(1) 新石器時代後期の「地域」的社会の衰退と中原王朝の出現

- ① 横並びであった新石器時代後期的な地域間関係（メッシュ型）は、前1700年前後における中原王朝の成立過程で再編成され、中原王朝を「中心」とする新たな地域間関係（スター型）が華北・華中の広域を巻き込んで形づくられた。この地域間関係は、緩やかな政治的側面をとまなうものであったと推測される。
- ② 中原王朝の登場とは表裏の関係として、華北・華

中における新石器時代後期の「地域」的社会の衰退、瓦解があった。前2500年頃以降に繰り返された気候の変動（4.2ka イベント）は地域的社會が衰退する一因となったが、中原地区の社会は、この気候変動に対して一定の耐性をそなえていた。

- ③ 中原王朝を中心とした「中心」「周辺」の地域間関係の地理的枠組みは、のちの古代帝国の時代に顕在化する「中国」的世界の地理的な枠組みの原型となるものと考えられる。

(2) 新石器時代後期の「早期都市」

- ① 新石器時代後期の早期都市は、等質的な「地域」において発展してきた「地域」的社會の中心であった。
- ② 「地域」の枠をこえた交流関係も盛んであったが、その地理的な広がりには一定の限界もあった。
- ③ 早期都市の祭祀空間は、一般に外に対して開かれた構造をもち、地域的社會の多数の住人が参集する公共的な空間となっていた。
- ④ 早期都市は「地域」の宗教センターとしての性格をもっていた。
- ⑤ 隔絶した地位をもつ王権の存在、安定した王統などは確認されていない。
- ⑥ 大規模な城壁、環濠、水系システムなどの建設は、宗教センターにおける宗教的行為としての協業によりすすめられた可能性がある。

(3) 中原王朝の王都

- ① 華北・華中を巻き込んで地域間関係の中心地域となった中原王朝政体の首都であった。
- ② 中原王朝（夏・殷・西周）の王都は、征服戦争や王朝交代といった事件を起点として、王朝の政治的な判断により建設された。
- ③ 広域を巻き込むような宗教センターとしての性格は稀薄であった。
- ④ 宮殿・宗廟区、祭祀区、王陵区などは牆垣あるいは環濠で囲まれ、宮殿や宗廟などの大型建築は土塀や回廊をめぐらせることが多く、外部に対して閉じた空間を構成していた。
- ⑤ 新石器時代後期の早期都市に比べて、中軸、方位などが意識された計画都市としての性格が明確になっている。
- ⑥ 初期王朝時代の都市において都市を囲む城壁（外郭城）は、周辺地域との緊張関係のあるなしにより、建設される場合とされない場合があった（許宏の「大都無城」説）。

- ⑦ 王都は、族的集団の居住地である「族邑」をその基本的な構成単位としていた。

(4) 王都を構成した「族邑」群

- ① 中原王朝の王都は、族的集団の生活の場、墓地、手工業工房、祭祀の場などが一つになった多数の「族邑」と呼ばれる単位によって構成されていた。
- ② 王室の宮殿・宗廟区を中心として、その周囲に分布した各族邑がしだいに人口を増加させて膨張し、また族邑の数自体も増加して、都市全体として稠密な人口構成を形成していくすがたは族邑モデルと呼ばれる。
- ③ 王都は宮殿・宗廟区、官営工業区など王室が直接管理する部分と、その周囲の族邑からなっていた。これらさまざまな都市の構成単位を「功能区」と呼ぶことがある。王都内には多種多様な功能区が分布し、道路網、水系システムなどが各功能区を結んで都市の全体を構成していた。
- ④ 王都の族邑は、征服戦争で王朝内に取り込まれた集団、あるいは前王朝に従っていた集団など、血縁的背景や文化的背景がさまざまな集団から構成されていた。したがって王都がそうした多様な族邑の集合体であること自体が、王都のもつ多様性を物語っている。
- ⑤ 殷王朝後期の王都である殷墟の族邑に居住し、王朝の官職を得ていた族的集団のなかには、王都から遠く離れた地方（「二次的地域」）にかれら族的集団の本拠地が見いだされることがある。西周時代には、ある氏族的集団のなかのある一つの集団（家族的集団をふくむ）は王都のなかにあつて族邑をつくり、王朝の官職を得ていた。また、一族のある集団は「畿内的地域」のなかに采邑（氏族的集団の経済的基盤となる集落）をつくり、さらにある場合には、一族内のある集団が、遠く「二次的地域」に封建されて諸侯となった。これら一つの氏族的集団から分かれた集団は、同族として互いに連携して西周王朝の政治システムを支えていた。

(5) 都市の住人をまとめていたもの

- ① 王都内の族邑の住人をまとめていたものは、血縁的紐帯の意識であつたが、族邑内でおこなわれたであろう一族の祖先祭祀が、その血縁的紐帯を維持強化する場であつた。
- ② 族邑と王室、族邑と族邑との緩やかな結束の背景には、各族邑内の祖先祭祀において、一族の祖先と歴史を、王室の祖先とその歴史に重ねて語るこ

とによって、一族と王室との結びつきを確認するということがあつた。また、王室による王の祖先祭祀には、各族邑の代表者が参加したことが考えられ、その場において王室と族邑、族邑と族邑間の連帯が繰り返し確認されたと思われる。

- ③ 西周王朝の王都である周原で発見された「社祀」遺構は、王都の内城の中央北部、宮城の中央部にあって、王室の宮殿・宗廟とともに一つの建築群をなしている。初期王朝時代を通じて、天や地に代表される自然神に対する祭祀体系が整備され、西周時代には「社祀」が確立されて、後世に言われる「左祖（宗廟）、右社」という王都や国都の骨格が形づくられたようである。
- ④ 血縁的紐帯を背景とした祖先祭祀とはことなり、王が主宰する土地神あるいは自然神を対象とした祭祀に、王都内の各族邑の代表者が参集したであろうことは、いわゆる地縁的な集団間の結びつきを強化するはたらきがあつたと思われる。

(6) 中原王朝王都の選地思想

- ① 中原王朝王都の建設は、国家的な政体の形成と同時に進められた。
- ② 王都の建設地は、その直前の時期に大型集落などがなかった土地、人口稀薄な空白にも近い状態にあった土地が選ばれた。
- ③ 王都は、経済的な拠点あるいは交通上の要地としてすでに成立していた拠点集落を継承するものではなかった。
- ④ 建設地の最終的な決定は、伝世文献に関連記載がある西周王朝では、王による占トをおこない、神意をうけた政治的判断によるものとされた。
- ⑤ 王都は、王朝の誕生、王朝の交代、政権の変動とともに建設がはじまり、一方、王朝の交代や政権の変動を原因として廃棄された。
- ⑥ 西周王朝の三つの王都のうち中原地区の中央に建設された洛邑（成周）は、建設の当初から「中国」という言葉が使われ、「四方」を統治する「中国」という理念をもって建設された。洛邑（成周）の土地の選択はまた、かつての夏王朝の王都の土地を継承したと認識されており、夏王朝、殷王朝と続いた中原王朝の正当な継承者を意識した選択でもあつた。

(7) 政治圏の中心としての王都

- ① 二里头文化期（夏王朝）の中原王朝の政治圏は、畿内的地域、二次的地域、外域の3重構造となつ

- ていた。
- ② 王都（および都城圏）は、その畿内的地域の中核として建設され、畿内的地域における集落の階層的秩序と王朝構成員の階層的秩序の頂点に位置する存在であった。
- ③ 二次的地域には遠隔地の自然資源と遠隔地間の交通路を確保する目的で植民的拠点（地方都市）が配置された。これらの地方都市は、中央政権の政治的目的によって建設されたもので、中央政権が変動すると多くの場合は廃棄された。
- ④ 外域の首長層は、中原王朝とは緩やかな政治的関係性を構築していた。中原王朝と外域首長層との往来においては、中原王朝政体の中心である王都だけが交流の窓口となっており、外域からもたらされるモノや情報の痕跡は王都からのみ発見される。一方、外域で受容され威信財ともなったさまざまなモノや情報は、基本的に王都から発信されたと考えられる。
- ⑤ 二里头文化期（夏王朝）の政治圏の3重構造は、殷王朝、西周王朝にも、その外形的な成り立ちが継承された。西周王朝について言われる、「三事」（内服）が畿内的地域に相当し、「四方」（外服）が二次的地域に対応する。四方の地には周王に

よって封建された諸侯が、各地に地方都市（諸侯の国都）を建設した。ただし、西周時代の二次的地域の地方都市では、王朝中央の政権の変動などの影響は小さく、しだいに自律的な諸侯国となって春秋戦国時代の国々へと受け継がれていく。

*

本稿は、中国初期王朝時代の王都が、政治と管理の中心として成立した都市であったことを、できるだけ簡潔にまとめてみようと考えたものであった。しかし、国家や文明とは切り離せない都市という対象の複雑な成り立ちもあって、関連する問題についてあれこれと言及するうちに、まとまりのよくない概論のようになってしまったかもしれない。本稿で述べたなかのいくつかの論点については、機会をあらためて再考したい。

衛星画像の利用など図の作成等において渡部展也氏からデータの提供をうけるなどご協力をいただきました。また、本稿の構成等について渡部森哉氏から貴重な意見をいただきました。ここに記して感謝いたします。本研究は JSPS 科研費 JP21K00976、JP18K18545 の助成を受けたものです。

表2 新石器時代から初期王朝時代の略年表（本稿で扱う主な地域の諸文化）
[中国社会科学院考古研究所編著 2010] などにもとづく

新石器時代（年代BC） 地域	早期 7000	前期 5000	中期 4000	後期 3000	初期王朝 2000 時代
黄土高原（陝北）			仰 韶 遺 存	龍山早期 遺存	石峽文化
中原（黄河以北）	南莊頭	磁 山	仰韶文化群	廟底溝二期	陶 寺 後岡二期 二里頭 殷文化
中原（黄河以南）		裴李崗	仰韶文化群	廟底溝二期	王灣三期 新砦 二里頭 王油坊 殷文化
黄河下流（山東）		后 李 北 辛	大 汶 口		山東龍山 岳 石 殷文化
長江下流（太湖）	上 山	跨湖橋	馬 家 浜 河 姆 渡	崧 澤 良 渚	馬 橋
東南部（內陸部）	甌皮岩 仙人洞			樊 城 堆 石 峽	吳 城
長江中流	玉蟾岩	彭頭山 皂市下層	大 溪	屈 家 嶺	石家河・後石家河
長江上流（四川）				宝 墩	三星堆 十二橋

参照文献

(日本語文献／中国語文献)

安陽市文物考古研究所

- 2021 「河南安陽辛店商代晚期鑄銅遺址2016年発掘簡報」『文物』2021年第4期、pp. 4-34。

飯島 武次

- 2012 『中国夏王朝考古学研究』同成社。
2022 「殷墟侯家莊西北岡大墓の建造順序と墓主」『張長寿・陳公柔先生紀念文集』李峰・施勁松（主編）、pp. 78-108、中西書局。
2024 「西周王朝王都としての周原遺跡—周原遺跡と、豊邑・鎬京・洛邑・周公廟遺跡の關係—」『駒澤考古』第49号、pp. 267-296。

伊藤 道治

- 1987 「付論三 西周王朝と雒邑」『中国古代国家の支配構造—西周封建制度と金文—』、pp. 395-413、中央公論社。
1987 『中国古代国家の支配構造—西周封建制度と金文—』中央公論社。

王 建峰・井 中偉

- 2020 「殷墟孝民屯“族墓地”分区研究」『中国国家博物館館刊』2020年第1期、pp. 35-43。

王 震中

- 2010 『商代都邑』中国社会科学出版社。

王 寧遠・袁 俊平・趙 曄

- 2020 「良渚古城周辺における水利システムの発見と基礎的研究」『河姆渡と良渚』中村慎一・劉斌（編）、pp. 73-85、雄山閣。

大貫 静夫

- 1997 「『中国文物地図集—河南分冊—』を読む—嵩山をめぐる遺跡群の動態—」『住の考古学』藤本強（編）、pp. 139-154、同成社。
2021 「土器から考える殷王朝の始まり」『中国考古学論叢—古代東アジア社会への多角的アプローチ—』大貫静夫（編）、pp. 1-79、同成社。

岡村 秀典

- 2008 『中国文明 農業と礼制の考古学』京都大学学術出版会。

小澤 正人・谷 豊信・西江 清高

- 1999 『中国の考古学』同成社。

何 毓靈

- 2018 「殷墟近十年発掘の収獲と思考」『中原文物』2018年第5期、pp. 4-8。
2019 「論殷墟手工業布局及其源流」『考古』2019年第6期、pp. 75-88。
2021 「洹北商城与殷墟的水系及相關問題」『考古』2021年第9期、pp. 82-94。
2022 「“日用而不覺”的殷墟：“考古中国之河南篇”之四」

『博覽群書』2022-12、pp. 25-31。

何 俊謙

- 2020 「殷墟墓地人口復原及殷墟都城人口規模的蠡測」『古代文明』第14卷、pp. 32-67。

何 鷺

- 2009 「都城考古の理論与实践探索：從陶寺城址和二里头都城考古分析看中国早期城址化過程」『三代考古（三）』、pp. 3-58、科学出版社。
2019 「陶寺遺址の水資源利用和水控制」『故宮博物院院刊』2019年第11期、pp. 85-98。
2022 「堯舜“中国”：陶寺遺址発掘与研究」『芸術博物館』2022-6、pp. 31-39。

解 希恭

- 2007 『襄汾陶寺遺址研究』科学出版社。

岳 洪彬・何 毓靈・岳 占偉

- 2011 「殷墟都邑布局研究中的幾個問題」『三代考古（四）』、pp. 248-278、科学出版社。

郭 士嘉・雷 興山・種 建榮

- 2021 「周原遺址西周“手工業園區”初探」『南方文物』2021年第2期、pp. 147-153。

角道 亮介

- 2014 『西周王朝とその青銅器』六一書房。
2018 「周原遺跡における西周都城の都市構造」『中国考古学』第18号、pp. 9-30。
2021 「中国初期王朝時代における「中心」の形成」『社会進化の比較考古学—都市・権力・国家—』北條芳隆ほか（編）、季刊考古学・別冊35、pp. 55-68、雄山閣。

郭 宝鈞

- 1951 「一九五〇年春殷墟発掘報告」『考古学報』第5冊、pp. 1-61。

郝 本性

- 1992 「試論鄭州出土商人頭骨飲器」『華夏考古』1992年第2期、pp. 94-100。

葛 英会

- 1989 「殷墟墓葬的区与組」『考古学文化論集(2)』蘇秉琦（主編）、pp. 152-183、文物出版社。

河南省文物考古研究所

- 2001 『鄭州商城 1953-1985』文物出版社。

韓 建業

- 1997 「殷墟西区墓葬分析」『考古』1997年第1期、pp. 62-72。

魏 建震

- 2008 『先秦社祀研究』人民出版社。

魏 繼印

- 2019 「論新砦文化与王湾三期文化的關係」『考古学報』2019年第3期、pp. 301-326。

菊地 大樹

- 2022 「牧畜のきた道」『家畜の考古学』菊地大樹・丸山真史（編）、pp. 79-92、雄山閣。

牛 世山・楊 靖雅

- 2019 「中国古代初期城址的营建考察：以石家河聚落群、陶寺城址为例」『江汉考古』2019年第5期、pp. 47-58。

許 宏

- 2006 「從二里頭遺址看華夏早期國家的特質」『中原文物』2006年第3期、pp. 39-41。
2009 『最早的中国』科学出版社。
2016a 『何以中国：公元前2000年的中原图景』生活・讀書・新知三聯書店。
2016b 『大都無城：中国古都的動態与解讀』生活・讀書・新知三聯書店。
2017 『先秦城邑考古』金城出版社・西苑出版社。

久保田 慎二

- 2021 「下七垣文化研究の現状と課題」『中国考古学論叢—古代東アジア社会への多角的アプローチ—』大貫静夫(編)、pp. 81-100、同成社。

嚴 志斌

- 2022 「關於殷墟的“族邑”問題与“工房区模式”」『中国国家博物館館刊』2022年第10期、pp. 56-76。

胡 厚宣

- 1974 「中国奴隶社会的人殉和人祭 下篇」『文物』1974年第8期、pp. 56-67。

胡 松梅・楊 瞳・楊 苗苗・邵 晶・邱 楠

- 2022 「陝西靖边廟梁遺址動物遺存研究兼論中国牧畜的形成」『第四紀研究』第42卷第1期、pp. 17-31。

吳 桐

- 2020 「血縁与地縁：殷墟西区墓地制度再研究」『西部考古』2020年第1期、pp. 56-67。

吳 文祥・劉 東生

- 2004 「4000a.B.P. 前後東亞季風變遷与中原周圍地区新石器文化衰落」『第四期研究』第24卷第3期、pp. 278-284。

小泉 龍人

- 2013 「都市論再考—古代西アジアの都市化議論を検証する—」『ラーフィダーン』第XXXIV卷、pp. 83-116。

郜 向平

- 2018 「晚商“族墓地”再檢視」『古代文明』第12卷、pp. 123-131、上海古籍出版社。

湖北省文物考古研究所・北京大学考古文博学院・天門市博物館

- 2017 「湖北天門市石家河遺址2014～2016年的勘探与发掘」『考古』2017年第7期、pp. 31-45。

湖北省文物考古研究所編

- 2019 『紀念石家河遺址考古发掘60年學術研討会論文集』科学出版社。

蔡 寧・種 建榮・雷 興山

- 2022 「陝西周原雲塘制骨作坊“居葬合一”論」『四川文物』2022年第2期、pp. 91-97。

佐藤 信弥

- 2016 『周一理想化された古代王朝—』(中公新書)、中央公論新社。

史 念海

- 2001 『黄土高原歴史地理研究』黄河水利出版社。

種 建榮

- 2018 「周原遺址姚家墓地結構分析」『華夏考古』2018年第5期、pp. 83-90。
2023 「周原遺址考古新發現与商周聚落再認識」『2022年度日本中国考古学会大会予稿集』(日本中国考古学会)、pp. 25-38。

朱 鳳瀚

- 1990 『商周家族形態研究』天津古籍出版社。

周原考古隊

- 2015 「周原遺址鳳雛三号基址2014年发掘簡報」『中国歴史博物館館刊』2015年第7期、pp. 6-24。
2020 「陝西宝鷄市周原遺址鳳雛六号至十号基址发掘簡報」『考古』2020年第8期、pp. 3-18。
2023 「2020-2021年周原遺址西周城址考古簡報」『中国国家博物館館刊』2023年第7期、pp. 6-30。

邵 晶

- 2019 「初論陝北地区龍山前期遺存」『考古与文物』2019年第4期、pp. 61-65。

秦 嶺

- 2019 「良渚遺址(古城)的形成：年代学初步研究」『良渚古城綜合研究報告』浙江省文物考古研究所(編)、pp. 335-337、文物出版社。

浙江省文物考古研究所

- 2019 『良渚古城綜合研究報告』文物出版社。

浙江省文物考古研究所・山东大学考古学与博物館学系

- 2021 「杭州市余杭区良渚古城外圍水利系統老虎嶺水壩考古勘探与发掘」『考古』2021年第6期、pp. 3-14。

陝西周原考古隊

- 1978 「陝西扶風莊白一号西周青銅器窖藏发掘簡報」『文物』1978年第3期、pp. 1-18。

陝西省考古研究院史前考古研究室

- 2018 「2008～2017史前考古綜述」『考古与文物』2018年第5期、pp. 10-40。

陝西省考古研究院・北京大学考古文博学院・宝鷄市周原博物館編著

- 2018 『周原遺址東部辺縁：2012年度田野考古報告』上海古籍出版社。

陝西省考古研究院・北京大学考古文博学院・榆林市文物考古勘探工作隊・榆林市文物保護研究所・清澗県博物館

- 2024 「陝西清澗県寨溝商代遺址」『考古』2024年第10期、pp. 34-52。

陝西省考古研究院・榆林市文物考古勘探工作隊・神木市石峁遺址管理处

- 2020 「陝西神木市石峁遺址皇城台大台基遺迹」『考古』2020年第7期、pp. 34-46。

蘇 秉琦

- 1994 『華人・龍的伝人・中国人：考古尋根記』 遼寧大学出版社。
2004 『新探 中国文明の起原』 張明聲（訳）、言叢社（蘇秉琦1997『中国文明起原新探』 商務印書館・香港）。

蘇 秉琦・殷 璋璋

- 1981 「關於考古学文化的区系類型問題」『文物』1981年第5期、pp. 10-17。

宋 江寧

- 2016 「对周原遺址鳳雛建築群的新認識」『中国国家博物館館刊』2016年第3期、pp. 55-61。

宋 鎮豪

- 2003 「夏商城邑的建置要素」『商承祚教授百年誕辰紀年文集』 文物出版社、pp. 149-168。

曹 大志・陳 篠

- 2015 「鳳雛三號基址初步研究」『中国国家博物館館刊』2015年第7期、pp. 25-38。

曹 大志・種 建榮・唐 錦瓊

- 2024 「陝西寶雞周原遺跡2023年發掘收穫」『2023中国重要考古發現』 国家文物局（主編）、pp. 205-209、文物出版社。

孫 慧琴

- 2023 「龍山到二里頭時代的洛陽盆地：以網絡分析為中心」『中原早期青銅時代：聚落与礼器專題研究』 中国社会科学院考古研究所ほか（編）、pp. 1-116、科学出版社。

孫 周勇・邵 晶・邱 楠

- 2020a 「石峁文化的命名、範圍及年代」『考古』2020年第8期、pp. 101-108。
2020b 「石峁遺址的考古發現与研究綜述」『中原文物』2020年第1期、pp. 39-63。
2022 「陝西神木市石峁城址皇城台大台基遺迹」『新世紀中国考古新發現（2011～2020）』、pp. 121-126、社会科学文献出版社。

孫 周勇・邵 晶

- 2020 「石峁遺址皇城台大台基出土石彫研究」『考古与文物』2020年第4期、pp. 40-48。

竹内 康浩

- 2003 「第三章 西周」『世界歴史大系 中国史1』 松丸道雄ほか（編）、pp. 163-219、山川出版社。

谷 秀樹

- 2014 「周王の所在地の変遷について—西周王朝における2つの王統一」『立命館文学』第637号、pp. 39-62。

中国社会科学院考古研究所

- 1994 『殷墟の發現与研究』 科学出版社。
1999 『偃師二里頭（1959～1978考古發掘報告）』 中国大百科全書出版社。
2013 『偃師商城 第一卷』 科学出版社。
2014a 『偃師二里頭（1999～2006）』 文物出版社。

2014b 『安陽大司空：2004年發掘報告』 文物出版社。

中国社会科学院考古研究所編著

2003 『中国考古学 夏商卷』 中国社会科学出版社。

2010 『中国考古学 新石器卷』 中国社会科学出版社。

中国社会科学院考古研究所・山西省臨汾市文物局

2015 『襄汾陶寺 1978～1985年考古發掘報告』 文物出版社。

中国社会科学院考古研究所・美国明尼蘇達大学（ミネソタ大学）（中美洹河流域考古隊）

1998 「洹河流域区域考古研究初步報告」『考古』1998年第10期、pp. 13-22。

中国社会科学院考古研究所安陽工作隊

1979 「1969-1977年殷墟西区墓葬發掘報告」『考古学報』1979年第1期、pp. 27-157。

2023 「河南安陽市殷墟商王陵区及周辺遺存」『考古』2023年第7期、pp. 44-59。

中国社会科学院考古研究所山西工作隊・山西省考古研究所・臨汾市文物局

2004 「山西襄汾県陶寺遺址祭祀区大型建築基址2003年發掘簡報」『考古』2004年第7期、pp. 9-24。

趙 海濤

2020 「二里頭都邑聚落形態新識」『考古』2020年8期、pp. 109-120。

2023 「二里頭都邑布局和手工業考古的新收穫」『2022年度日本中国考古学会大会予稿集2023年』 日本中国考古学会（編）、pp. 5-16。

趙 海濤・許 宏

2019 「中華文明總進程的核心与引領者：二里頭文化的歷史位置」『南方文物』2019年第2期、pp. 57-67。

張 海

2021 『中原核心区文明起原研究』 上海古籍出版社。
2022 「再論中国早期文明起原的階段性」『考古学研究（十三）』 上册、北京大学考古文博学院・北京大学中国考古学研究中心（編）、pp. 156-171、科学出版社。

趙 輝

2000 「以中原為中心的歷史趨勢的形成」『文物』2000年第1期、pp. 41-47。

2006 「中国的史前基礎：再論以中原為中心的歷史趨勢」『文物』2006年第8期、pp. 50-54。

陳 国梁

2014 「略論二里頭遺址的圍垣作坊区」『夏商都邑与文化（二）』 中国社会科学院考古研究所（編）、pp. 92-108、中国社会科学出版社。

2019 「合与分：聚落考古視角下二里頭都邑的興衰解析」『中原文物』2019年第4期、pp. 71-80。

陳 小三

2022 「石峁皇城台石彫的幾点認識」『考古与文物』2022年第2期、pp. 86-93。

鄭 若葵

1995 「殷墟“大邑商”族邑布局初探」『中原文物』1995年第3期、pp. 84-93。

- 杜 金鵬
2007 「安陽後岡殷代円形葬坑及其相關問題」『考古』2007年第6期、pp. 76-89。
- 杜 金鵬・王 学榮主編
2004 『偃師商城遺址研究』科学出版社。
- 董 琦
2000 『虞夏時期的中原』科学出版社。
- 唐 際根
1998 「殷墟家族墓地初探」『中国商文化國際學術討論會論文集』pp. 201-207、中国大百科全書出版社。
- 唐 際根・岳 洪彬・何 毓靈・牛 世山・岳 占偉・荆志淳
2016 「洹北商城与殷墟的路網水網」『考古学報』2016年第3期、pp. 319-342。
- 唐 際根・荆 志淳
2009 「安陽的“商邑”与“大邑商”」『考古』2009年第9期、pp. 70-80。
- 鄧 聰主編
2018 『牙璋与国家起源 牙璋図録及論集』科学出版社。
- 中村 慎一
1997 「石家河遺跡と中国都市文明の起源」『住の考古学』藤本強(編)、pp. 155-169、同成社。
- 2020 「稻作文明の形成」『河姆渡と良渚』中村慎一・劉斌(編)、pp. 353-365、雄山閣。
- 2022 「良渚遺跡群出土の異系統土器」『中国江南の考古学』中村慎一(編)、中国文明起原プロジェクト、pp. 3-10、六一書房。
- 2023 「方形環壕の広がり」『中国新石器時代文明の探求』中村慎一(編)、中国文明起原プロジェクト、pp. 3-8、六一書房。
- 中村 慎一編
2023 『中国新石器時代文明の探求』中国文明起原プロジェクト、六一書房。
- 中村 慎一・劉 斌編
2020 『河姆渡と良渚』雄山閣。
- 南京博物院
1973 「江蘇銅山丘湾古遺址的発掘」『考古』1973年第2期、pp. 71-79。
- 西江 清高
1990 「『中国』的文化領域の原型と『地域』文化」『文化人類学』第8号、pp. 135-145、アカデミア出版会。
- 1995 「『中原』の意味するもの」『アジア読本 中国』曾士才ほか(編)、pp. 22-29、河出書房新社。
- 2003 「第一章 先史時代から初期王朝時代」『世界歴史大系 中国史1』松丸道雄ほか(編著)、pp. 3-102、山川出版社。
- 2014 「二里头文化期中原王朝の政治空間模式」『夏商都邑与文化(一)』中国社会科学院考古研究所(編)、pp. 159-168、中国社会科学出版社。
- 2016 「宝鶏石鼓山西周墓の発現和高領袋足鬲的年代」『西部考古』(西北大学)第10輯、pp. 89-101。
- 2019a 『西周王朝の形成と関中平原』同成社。
- 2019b 「多様な青銅器文化—形成期の「中国」的世界とその周辺—」『東洋文化研究』(学習院大学)第21号、pp. 173-193。
- 2021 「論中原王朝の“外域”出土の牙璋及其在中国古代史上的意義」『アカデミア 人文・自然科学編』(南山大学)、pp. 53-68。
- 2022 「西周王朝“畿内地域”の交通路線」『張長寿、陳公柔先生紀念文集』李峰・施勁松(編)、pp. 200-211、中西書局。
- 馬 明志
2019 「石峁遺址文化環境初步分析：河套地区龍山時代至青銅時代的文化格局」『中華文化論壇』2019年第6期、pp. 31-44。
- 林 巳奈夫
1995 『中國文明の誕生』吉川弘文館。
- 費 孝通編著
2008 『中華民族の多元一体構造』西澤治彦ほか(訳)、風響社。
- 平林 頌子・横山 祐典
2020 「完新統／完新世の細分と気候変動」『第四紀研究』第59巻第6号、pp. 129-157。
- 藤本 強
2007 『都市と都城』(市民の考古学2)、同成社。
- 北京大学考古文博学院・北京大学古代文明研究中心編(徐天進主編)
2002 『吉金鑄国史』文物出版社。
- 北京大学中国考古学研究中心・宝鶏青銅器博物院
2017 『宝鶏青銅器博物院藏商周青銅器』上海古籍出版社。
- 方 燕明
2019 「近年禹州瓦点遺跡考古発現与研究概述」『区域、社会与中国文明起源』張弛・陳星燦・鄧振華(編)、pp. 121-137、科学出版社。
- 宝鶏市周原博物館編著
2016 『周原：莊白西周青銅器窖藏考古発掘報告』科学出版社。
- 彭 裕商
2000 「新邑考」『歴史研究』2000年第5期、pp. 49-62。
- 榎林 啓介
2013 「栽培体系の形成と伝播・拡散から見た先史中国の稲作と地域社会」『国際常民文化研究叢書』3、神奈川大学国際常民文化研究機構、pp. 17-29。
- 松井 嘉徳
2013 「社稷」『中国文化史大事典』p. 521、大修館書店。
- 松丸 道雄
1980a 「西周青銅器製作の背景」『西周青銅器とその国家』松丸道雄(編)、pp. 11-136、東京大学出版会。
- 1980b 「西周青銅器中の諸侯製作器について—一周金文研究・序章その二—」『西周青銅器とその国家』松

- 丸道雄(編)、pp. 137-184、東京大学出版会。
- 2001 「殷周春秋史総説」『殷周秦・漢時代史の基本問題』pp. 3-26、汲古書院。
- 2003 「第二章 殷」『世界歴史大系 中国史 1』松丸道雄ほか(編)、pp. 103-162、山川出版社。
- 2022 「何以“殷墟”：《殷人的觀念世界》統篇」『張長寿、陳公柔先生紀念文集』李峰・施勁松(編)、pp. 70-77、中西書局。
- 2024 『殷周史甲骨金文研究』[上卷][下卷]、大修館書店。
- 宮本 一夫
- 2020 『神話から歴史へ 神話時代 夏王朝時代』(学術文庫版)、講談社。
- 孟 華平
- 2019 「石家河遺址聚落研究的進展」『区域、社会与中国文明起原』張弛・陳星燊・鄧振華(編)、pp. 253-264、科学出版社。
- 持井 康孝
- 1981 「殷墟西北岡出土の魚鼎と亞守鼎一般代青銅器研究試錐(一)」『東洋文化研究所紀要』東京大学東洋文化研究所、第86冊、pp. 27-104。
- 俞 偉超
- 1973 「銅山丘湾商代社祀遺迹の推定」『考古』1973年第5期、pp. 296-298。
- 2001 「20世紀中国考古学的一座里程碑」『蘇秉琦与当代中国考古学』宿白(主編)、pp. 3-9、科学出版社。
- 雷 興山
- 2017 「周原遺址商周時期聚落分区方法芻論」『李下蹊華：慶祝李伯謙先生八十華誕論文集』何篤(主編)、pp. 130-141、科学出版社。
- 雷興山・種建榮
- 2014 「周原遺址商周時期聚落新識」湖北省博物館編『大宗維翰：周原青銅器特展』、pp. 18-29、文物出版社。
- 李 學勤(林洋美・石黒ひさ子訳)
- 1995 「成周建設論—《何尊》の銘文を中心として—」『中国の古代都市』五井直弘(編)、pp. 201-221、汲古書院。
- 李 貴昌・李 陽・孟 小仲
- 2017 「殷墟大型族邑聚落墓地中墓葬陶器組合の比較研究」『殷都學刊』2017年第1期、pp. 9-17。
- 李 久昌
- 2007 「偃師二里頭遺址的都城空間結構及其特徵」『中国歴史地理論叢』第4輯、pp. 49-59。
- 李 宏飛
- 2020 「試論邳州梁王城遺址發現的西周墓葬：兼論銅山丘湾社祀遺迹的年代」『中原文物』2020年第1期、pp. 77-85。
- 李 伯謙
- 1998 「從靈石旌介商墓的發現看晋陝高原青銅文化的帰属」『中国青銅文化結構体系研究』、pp. 167-184、科学出版社。

- 劉 亦方
- 2019 「試論鄭州商城城垣形態及相關河道的變遷」『古代文明』第13卷、pp. 92-113、上海古籍出版社。
- 劉 亦方・張 東
- 2021 「關於鄭州商城內城布局的反思」『中原文物』2021年第1期、pp. 64-72。
- 劉 亦方・楊 樹剛・宋 国定
- 2021 「鄭州古代城址考古的回顧和思考」『華夏考古』2021年第2期、pp. 58-65。
- 劉 輝
- 2019 「長江中游新石器時代城址的空間分布及成因」『紀念石家河遺址考古發掘60年學術研討會論文集』湖北省文物考古研究所(編)、pp. 81-92、科学出版社。
- 劉 慶柱
- 2006 「中国古代都城考古学史述論」『考古学集刊』第16集、pp. 1-58、科学出版社。
- 劉 緒・趙 福生
- 1997 「琉璃河西周燕文化的新認識」『文物』1997年第4期、pp. 34-41。
- 劉 斌
- 2019a 「良渚城的興建」『良渚古城綜合研究報告』浙江省文物考古研究所(編)、pp. 59-68、文物出版社。
- 2019b 「良渚城的興衰与環境」『良渚古城綜合研究報告』浙江省文物考古研究所(編)、pp. 300-305、文物出版社。
- 劉 斌・趙 嘩・陳 明輝・閔 凱凱・王 永磊・朱 叶菲・朱 殊
- 2019 「城內的考古」『良渚古城綜合研究報告』浙江省文物考古研究所(編)、pp. 136-199、文物出版社。
- 劉 余力
- 2014 「論西周成周的營建」『中国国家博物館館刊』2014年第7期、pp. 76-83。
- 2020 『西周成周研究』文物出版社。
- 劉 莉
- 2007 『中国新石器時代：邁向早期國家之路』文物出版社。
- 劉 莉・陳 星燊
- 2002 「中国早期國家的形成：從二里頭和二里崗文化時期的中心和邊緣之間的關係談起」『古代文明』第一卷、pp. 71-134、文物出版社。
- 林 滢
- 2016 「中国考古学中“古国”“方国”“王国”的理論与方法問題」『中原文化研究』2016年第2期、pp. 5-13。
- 渡部 展也・西江 清高・金井 サムエル
- 2023 「山東における遺跡分布の長期的な變動と地域性」『2022年度日本中国考古学会大会予稿集』日本中国考古学会(編)、pp. 41-50。

(英語文献)

Chang, K. C.

1986 *The Archaeology of Ancient China, fourth edition*, Yale University Press.

Kajita, H., Kawahata, H., Wang, K., Yang, S., Zheng, H., Ohkouchi, N., Utsunomiya, M., Zhou, B., & Zheng, B.

2018 Extraordinary cold episodes during the mid-Holocene in the Yangtze delta: Interruption of the earliest rice cultivating civilization, *Quaternary Science Reviews*, 201(1): 418–428.

Kajita, H., Isaji, Y., Kato, R., Nishikura, Y., Murayama, M., Ohkouchi, N., Yang, S., Zheng, H., Wang, K., Nakanishi, T., Sasaki, T., Maeda, A., Suzuki, A., Yamanaka, T., & Kawahata, H.

2023 Climatic change around the 4.2 ka event in coastal areas of the East China Sea and its potential influence on prehistoric Japanese people, *Palaeogeography, Palaeoclimatology, Palaeoecology*, 609:111310–111310.

Liu Li, & Chen Xingcan

2003 *State Formation in Early China*, Bristol Classical

Press.

2012 *The Archaeology of China: From the Late Paleolithic to the Early Bronze Age* (Cambridge World Archaeology), Cambridge University Press.

Lynch, K.

1981 *A Theory of Good City Form*, MIT Press (Cambridge, Massachusetts).

Mizoguchi Koji, & Uchida Junko

2018 The Anyang Xibeigang Shang royal tombs revisited: a social archaeological approach, *Antiquity*, 92 (363), 709–723.

Watanabe Nobuya, Nakamura Shinichi, Liu Bin, & Wang Ningyuan

2017 Utilization of Structure from Motion for processing CORONA satellite images: Application to mapping and interpretation of archaeological features in Liangzhu Culture, China, *Archaeological Research in Asia*, 11: 38–50.

The Formation of the Cities (Royal Capitals) in the Early Dynasties of China

Kiyotaka NISHIE*

In this study, the formation process of ancient city in China will be considered from its earliest state, based on the evidences from archaeological discoveries and historical literatures. Firstly, the archaeological understanding about “Early City”, the large settlement evolved as a center of the regional society in the Late Neolithic Period, will be summarized. Then, the structure of the royal capitals of the succeeding Zhongyuan Dynasties (中原王朝) (Xia, Shang, Western Zhou) will be discussed with the understandings of the earlier cities. The summary of conclusions for the seven topics discussed in this paper are as follow.

1 The fall of the regional societies in the Late Neolithic Period, and the formation of Zhongyuan Dynasties

- i) The equitable interregional relationship (“Mesh networking” like structure) in the Late Neolithic Period was restructured into a radial center-periphery relationship (i.e. “Star network” like structure) through the formation process of Zhongyuan Dynasties (i.e. Xia, Yin, Western Zhou dynasty) in the second millennium BC. The formation of this dynasty centered relationship involved vast areas including both Yellow River and Yangtze River basin. However, this newly formed interregional relationship is assumed to have had rather loose political binds.
- ii) The regional society in Late Neolithic Period of Yellow River and Yangtze River basin (a society reliant on monoculture) collapsed during this formation of Zhongyuan Dynasties. One of the main reasons for this collapse is assumed to be related to the climatic change (4.2ka event). On the contrary, the society of Zhongyuan region (a society reliant on diversified agriculture) seemed to have had certain resilience against this change.

2 “Early City” in Late Neolithic Period

- i) “Early City” in Late Neolithic Period was a center of the regional society, which developed under relatively homogeneous environmental conditions.
- ii) The ritual area of “Early City” was opened to the members, rather, it was a public ritual center for gathering a large number of members to conduct ritual events.
- iii) The components of the ritual center, wall, ditch and water system were constructed by cooperative labors among the members of the region.

3 Royal capitals of Zhongyuan Dynasties

- i) The royal capitals of Zhongyuan Dynasties were a place that became a center of the polities through the reformation of interregional relationship across both the Yellow River and Yangtze River basins.
- ii) The royal capitals of Zhongyuan Dynasties were planned and constructed under political

reasoning, which mainly occurred in a chance of war of conquest or historical events.

iii) Royal capital did not have a ritual aspect as it had in the “Early City” in the Late Neolithic Period.

iv) The palace, “宗廟 (zōngmiào)” (Shrine to worship ancestries), ritual area, royal burial was enclosed with small city walls or ditches, which was closed to the public.

v) Construction of the outer city wall depended on their level of military tensions.

vi) The well-ordered road networks, water channels, and city zones of the royal capital imply its character as a planned city.

4 Clusters of “族邑” as a component of a royal capital

i) The royal capitals of Zhongyuan Dynasties were consisted of group of settlements (“族邑 (zúyì)” (clan-based settlement)) which each had their own daily-habitant zone, burial area, workshop, and ancestor worshipping area.

ii) The model explaining the enlarging process of the royal capital from increasing population of each “族邑”, encircling the palace and “宗廟”, is called “族邑 model”.

iii) “族邑” had a diversified background (e.g. groups absorbed by conquest, groups subordinated during the period of the former dynasty). These mixture of lineage and cultural backgrounds recognized in “族邑” demonstrates the diversity of the city’s members.

iv) The members of clan were not only living in “族邑” within the royal capital. Some of them lived in their homeland, and others lived in a remote area which was given through “封建 (fēngjiàn)” (bestowment of sovereignty (and land) to govern from the king to the feudal lord). These subgroups of the clan were related to one another, forming the foundation of the political system of Zhongyuan Dynasties.

5 The bond of the city residents

i) The members of “族邑” maintained their group as lineage by conducting rituals to worship their ancestors.

ii) On the other hand, the bond between the royal lineage and “族邑” was strengthened by historical myth which explains their relationship in the ancestral period. The solidarity between the royal lineage and “族邑” was also strengthened through rituals held by the royals where representatives from the “族邑” participated.

iii) “社祀 (Shèsì)” (Monument to worship the land god), which was found at the Zhouyuan archaeological site (considered as one of the royal capitals of Western Zhou Dynasty), was comprising a complex in the center of the royal capital with the palace and “宗廟”. Worshipping of “社祀” is assumed to have gradually formed over the early dynasty period, which finally became a foundation ritual of an ancient city by connecting the ancestral god with the land god.

iv) “社祀” which worship the land god is different with the ancestral worship in terms of its enhancement in the local relationship. An emergence of emphasis of the local relationship reflects the social change that occurred at the time of the early dynasties.

6 Selection of the royal capital location in the early dynasties

i) The construction and disposing of the royal capital in the periods of Zhongyuan Dynasties usually occurred under the change of regime or political disturbance.

- ii) The royal capital did not inherit the pre-existing economic center or transportation hub, but was instead planned based on political reasoning.
- iii) According to the historical literature from Western Zhou Dynasty, final decision of the location for new royal capital was made by the king through an oracle. This process was regarded as a king's political decision.
- iv) 洛邑 (Luòyì), one of the three capitals of the Western Zhou Dynasty, was planned from the very beginning as “中国 (Zhōngguó)” (country in the center of the world) to govern the “四方 (sìfāng)” (four surrounding regions in north, south, east, west). The land was recognized as the site where the royal capital of Xia Dynasty had been located 500 years ago; therefore, its selection was with the awareness of being a legitimate successor of Zhongyuan Dynasties.

7 Royal capital as a center of political zone

- i) The political zones in Erlitou Culture (Xia Dynasty) had concentric triplex structure which are, “Core area”, “Secondary area”, and “Outer skirt area”.
- ii) Royal capital was constructed as a central core, positioned at the summit of both the settlement hierarchy and the social ranks among its members.
- iii) In the “Secondary area”, colonial base (regional city) was placed to secure the natural resources and long-range trade routes. These distanced regional cities are constructed under the political purpose of the central polity. Therefore, the cities are usually abandoned with the fall of the central polity.
- iv) The chiefs in the “outer skirt area” had a loose political relation with the Zhongyuan Dynasties. Goods and information brought in to the area from the dynasties were accepted as a prestige goods for the local elites and chiefs.
- v) The triplex structure formed in Erlitou Culture (Xia Dynasty) was inherited to Shang Dynasty and Western Zhou Dynasty. At the time of Western Zhou Dynasty, “封建諸国” (countries founded through 封建 (fēngjiàn)) were born in the “四方” lands and local cities were constructed (Capitals of “封建諸国”).

Keywords

“Early City” in Late Neolithic Period, formation of Zhongyuan Dynasties, ritual center, selection of the royal capital location, “族邑 (zúyì)” (clan-based settlement), political zones in Zhongyuan Dynasties, rituals to worship their ancestors, “社祀 (Shè sì)” (monument to worship the land god)

* Nanzan Univeversity